

大阪市東淀川区

西淡路1丁目所在遺跡発掘調査報告

II

大阪市都市整備局による
日之出住宅建設工事(第2期)にかかる発掘調査報告書

2012.3

財団法人 大阪市博物館協会
大阪文化財研究所



大阪市東淀川区

西淡路1丁目所在遺跡発掘調査報告

II

大阪市都市整備局による
日之出住宅建設工事(第2期)にかかる発掘調査報告書

2012.3

財団法人 大阪市博物館協会
大阪文化財研究所

大阪市東淀川区

西淡路1丁目所在遺跡発掘調査報告

II

大阪市都市整備局による
日之出住宅建設工事(第2期)にかかる発掘調査報告書

2012.3

財団法人 大阪市博物館協会
大阪文化財研究所

序 文

本書は、東淀川区において実施した西淡路1丁目所在遺跡の発掘調査成果を報告するものである。この遺跡の報告書としては2冊目となる。

当地周辺は、東海道新幹線をはじめとする主要交通路が行き交う重要な拠点として、近年、急速に都市化が進んだ地域であるが、かつては淀川水系によって形成されたデルタに拡がる田園地帯であった。

この調査では、平安時代中期に遡る土壙や、鎌倉～室町時代の遺物を含む自然流路を検出した。自然流路の南岸から出土した多量の獣骨は皮革や肉の利用などに伴う残滓の投棄と考えられ、当地で行われた生業の一端を垣間見ることができる。

また、中世以降、近現代にいたるまで何層にもわたって営まれた作土層は、当地がいくたびにもわたる淀川水系の洪水を被りながらも、継続的に耕作地として利用してきたことを示している。

本遺跡の周囲には、隣接するように崇禪寺遺跡や宮原遺跡といった遺跡が拡がっている。今回の成果も、これらの遺跡における知見とともに、総合的に検討していく必要があろう。淀川デルタで営まれたひとびとの暮らしのようすは、こうした調査研究を続けるなかで明らかにできていくと期待する。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで多大なご協力を賜った大阪市都市整備局ならびに関係各位に対し、心より御礼申し上げる。

2012年3月

財団法人 大阪市博物館協会

大阪文化財研究所

所長 長山 雅一

例　　言

- 一、本書は、財団法人大阪市博物館協会 大阪市文化財研究所が大阪市の委託を受け、2010年度に東淀川区西淡路一丁目で実施した発掘調査(WA10-1次、WAは西淡路1丁目所在遺跡を示す略号)の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市都市整備局の負担による。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市博物館協会 大阪市文化財研究所次長 南秀雄、難波宮調査事務所長 高橋工の指揮のもと、主として嘱託調査員 尾上実が担当した。
- 一、本書の編集は、東淀川調査事務所長 佐藤隆が行った。執筆は主に佐藤が行ったが、層序・遺構については尾上の草稿をもとに佐藤が報告文を整えた。また、第Ⅲ章第3節の動物遺存体の固定については、独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所客員研究員 丸山真史氏に玉稿を賜った。
- 一、本書の用字・用語や体裁などの調整は、佐藤のほか、同研究所事業企画課長代理 清水和明・同学芸員 小倉徹也からなる校正委員が行った。
- 一、基準点測量および空中写真測量は、株式会社パスコに委託した。
- 一、遺構写真は調査担当者が撮影した。遺物写真の撮影は、西大寺フォト 杉本和樹氏に委託したほか、一部を学芸員 渡邊晴香が行った。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料はすべて当研究所が保管している。

凡　　例

1. 本書で用いた層序学・堆積学などの用語の中で、遺跡の地層に係る特殊な用語については[文化庁文化財部記念物
課編2010]に準じる。
2. 本書における遺構名の表記には、溝はSD、井戸はSE、土壙はSK、自然河川はNR、溜池はSG、その他のものは
SXを冠している。遺構番号は遺構の種別に関係のない通し番号としている。
3. 土器・陶磁器類と金属製品にはそれぞれ別に通し番号を付している。
4. 水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文中では「TP+○m」と省略した。また、座標値は「測地成果2000」
に基づく。図中の方位は図1・6が真北を基準に、それ以外は座標北を基準にしている。
5. 本書で用いた地層の土色は[小山正忠・竹原秀雄1970]に拠った。
6. 引用文献は巻末に示した。

本文目次

序文

例言・凡例

第Ⅰ章 遺跡周辺の地形と歴史.....	1
第1節 遺跡周辺の地形	1
第2節 既往の調査成果	3
第Ⅱ章 発掘調査から報告書刊行に至る経緯と経過.....	9
第1節 発掘調査に至る経緯	9
第2節 発掘調査および報告書作成の経過	10
第Ⅲ章 調査の結果.....	11
第1節 層序	11
第2節 遺構と遺物	16
1)奈良時代以前の遺物	16
2)平安～室町時代の遺構と遺物	16
i)第8層上面	ii)第7層上面
iii)第6層上面	iv)第4層上面
3)江戸時代の遺構と遺物	27
i)第3層上面および第2層下面	ii)第2層上面
第3節 西淡路1丁目所在遺跡出土の動物遺存体.....	35
1)概要	35
2)種類別の特徴	35
3)当遺跡の牛馬利用	36
4)まとめ	38
第Ⅳ章 調査成果のまとめ.....	39
引用・参考文献.....	40

英文目次

原色図版目次

- 1 出土遺物
中世の輸入磁器

図版目次

- 1 第8層上面遺構(一)
上：第8層上面遺構(北西から)
下：NR51(南東から)
- 2 第8層上面遺構(二)
上：NR51断面(西から)
中：SK52(北西から)
下：SK52遺物出土状況
- 3 第7層上面遺構
上：第7層上面遺構(北西から)
下：SD41・42(西から)
- 4 第6層上面遺構(一)
上：第6層上面遺構(北西から)
下：SX32(東から)
- 5 第6層上面遺構(二)
上：NR31動物遺存体出土状況(北東から)
下：NR31動物遺存体出土状況(南西から)
- 6 第6層上面遺構(三)
上：NR31動物遺存体出土状況(④)
中：NR31動物遺存体出土状況(⑤)
下：NR31動物遺存体出土状況(⑥)
- 7 第6層上面遺構(四)
上：NR31動物遺存体出土状況(⑨)
中：NR31動物遺存体出土状況(⑩)
下：NR31動物遺存体出土状況(⑪)
- 8 第3層上面および第2層下面・上面遺構
上：第3層上面および第2層下面・上面遺構(北西から)
下：SG11(南から)
- 9 第2層上面遺構(一)
上：SE14(南から)
中：SE14井戸側検出状況(南から)
下：SE14井戸側検出状況(南西から)
- 10 第2層上面遺構(二)
上：SE14に伴う導水施設(東から)
中：SE14受水部
下：SE13(南から)
- 11 奈良時代以前の遺物・SK52出土遺物
- 12 SK52・NR51出土遺物
- 13 NR31・SX32出土遺物
- 14 各層・その他出土遺物
- 15 SG11・SE14・その他出土遺物

挿 図 目 次

図1 西淡路1丁目所在遺跡の位置	1
図2 大阪市北部の地形分類図	1
図3 周辺の遺跡と調査地	3
図4 WA06-1次調査出土の古式土師器	4
図5 WA07-1次調査井戸SE25および出土遺物	5
図6 大阪市北部と周辺の条里地割	5
図7 MH94-2次調査第2面の遺構	5
図8 崇禪寺南方の中世後期大溝	6
図9 WA08-1次調査第4層上面の遺構	7
図10 調査区の配置	9
図11 地層と遺構の関係	11
図12 北壁地層断面図	12
図13 東壁地層断面図	13
図14 西壁地層断面図	14
図15 奈良時代以前の出土遺物実測図	16
図16 第8層上面遺構平面図	17
図17 SK52遺物出土状況図	18
図18 NR51の地層断面図	18
図19 SK52・NR51出土遺物実測図	19
図20 第7層上面遺構平面図	21
図21 第7層上面遺構断面図	22
図22 第6層上面遺構平面図	23
図23 第6層上面遺構平面・断面図	24
図24 SD31・SX32出土遺物実測図	25
図25 各層・その他出土遺物実測図	26
図26 第3層上面および第2層上面・下面遺構平面図	28
図27 SE14平面図・断面復元図	30
図28 SE13平面・断面図	31
図29 SG11・SE14・その他出土遺物実測図	33
図30 SE14出土木製品実測図	34
図31 動物遺存体出土状況図	37

表 目 次

表1 本遺跡における調査一覧	4
表2 種名表	35
表3 動物遺存体一覧表	36

写 真 目 次

写真1 空中写真測量の作業状況	10
写真2 北壁深掘り部分の地層断面	11
写真3 SD41(西から)	22
写真4 SD42(西から)	22
写真5 ④ウマの下顎骨(右、内側)	35
写真6 ⑧ウシの中手骨(左)	35

第Ⅰ章 遺跡周辺の地形と歴史

第1節 遺跡周辺の地形

西淡路1丁目所在遺跡は淀川右岸の大阪市東淀川区の西部に位置し、同川が形成したデルタ地帯に立地している(図1・2)。現況では直径約300mの範囲が遺跡として指定されており、本遺跡の東には弥生時代末～古墳時代の成果が注目される崇禪寺遺跡があり、西には平安時代～中世後期の集落・農業生産遺構が検出されている宮原遺跡がある。

これら3遺跡の現状地表面の標高を見ると、崇禪寺遺跡東端でTP+2.6m程度、西淡路1丁目所在遺跡付近でTP+1.3m程度、宮原遺跡西端でTP+1.0m程度と東ほど高く、崇禪寺遺跡付近が微高地を形成している。こ



図1 西淡路1丁目所在遺跡の位置

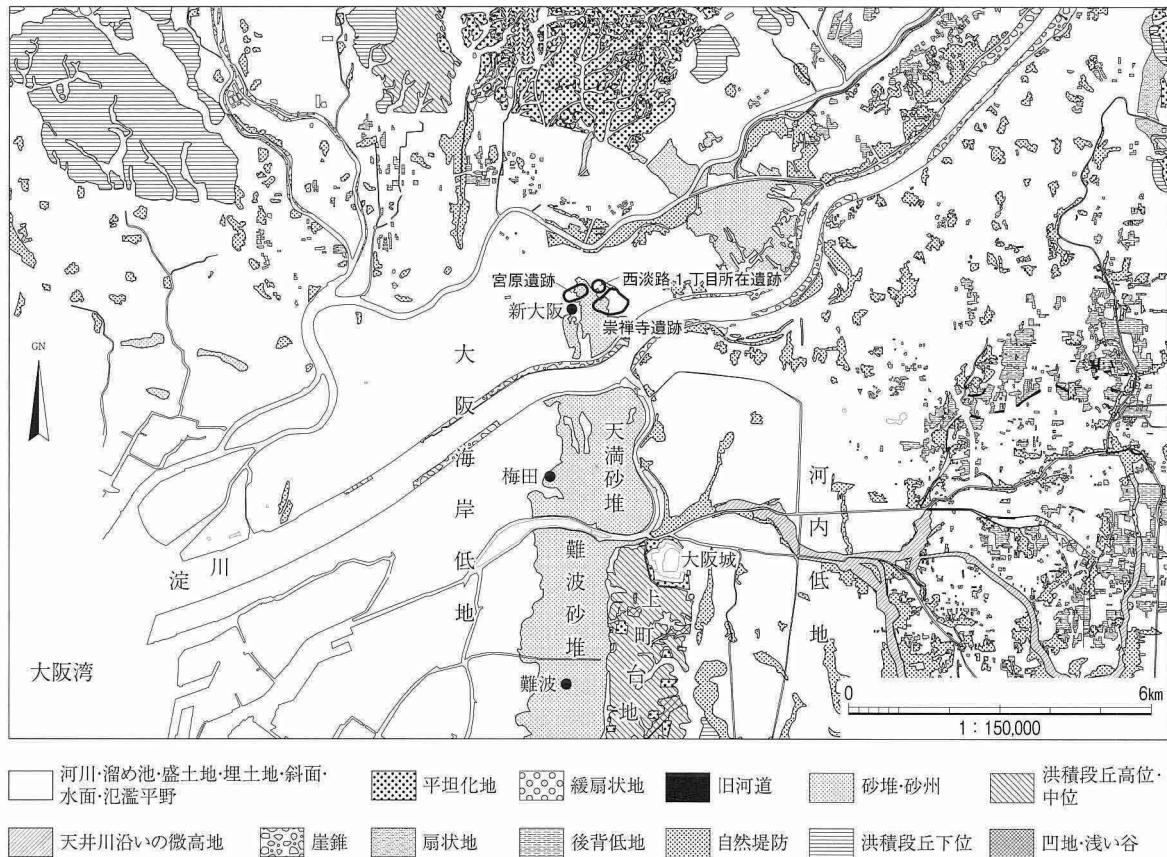


図2 大阪市北部の地形分類図(土地条件図[建設省国土地理院1983]に一部加筆)

第Ⅰ章 遺跡周辺の地形と歴史

の微高地の成因については、大阪湾岸流で形成された「長柄砂州」の一部とする見解があったが[梶山彦太郎・市原実1986]、近年では淀川の沖積作用をより大きく評価する見解が提出されている[趙哲済2005]。周辺の発掘調査における河川堆積層の観察からは、おおむね東→西、あるいは北→南の古流向が復元でき、淀川の沖積作用を重視する後者の見解がより蓋然性が高いといえる[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008c・2009、大阪市文化財協会2010、大阪文化財研究所2010]。

第2節 既往の調査成果

この節では本遺跡および近接する崇禪寺遺跡、宮原遺跡における既往の調査成果について見ていく。本遺跡におけるこれまでの調査については表1に一覧を示した。なお、崇禪寺遺跡についてはすでに3冊の調査報告書が刊行されており[大阪市文化財協会1999、大阪府教育委員会1982・2003]、同遺跡の詳細についてはそれらを参照されたい。

この地域で最初に人間活動の痕跡が認められるのは、弥生時代終末期(庄内期)の崇禪寺遺跡においてである。崇禪寺遺跡一帯は、前節で述べたように現状地形でも周辺よりやや高く、該期の生活面でもほかよりも高い地形に位置していたと考えられる。したがって、当地の地形形成の主要因が淀川の営力であるという近年の知見に基づけば、同川の堆積作用により形成された微高地上が、まず生活の場として選ばれている。以後、崇禪寺遺跡は布留式期Iの段階まで盛行するが、布留式期IIの時期にはいったん途絶える。この時期の崇禪寺遺跡の性格については、他地域産(系)土器の存在や鉄製素環頭大刀の出土から、水上交通や軍事上の拠点であったと評価されることが多い[積山洋1994ほか]。また、外来系土器を多く含む特徴的な土器群を対象として、その評価および編年的研究も行われているほか[杉本厚典1999a・b]、出土した貝類を対象として考察が行われるなど[池田研1999]、遺跡の特性に即した多様な検討が行われている。

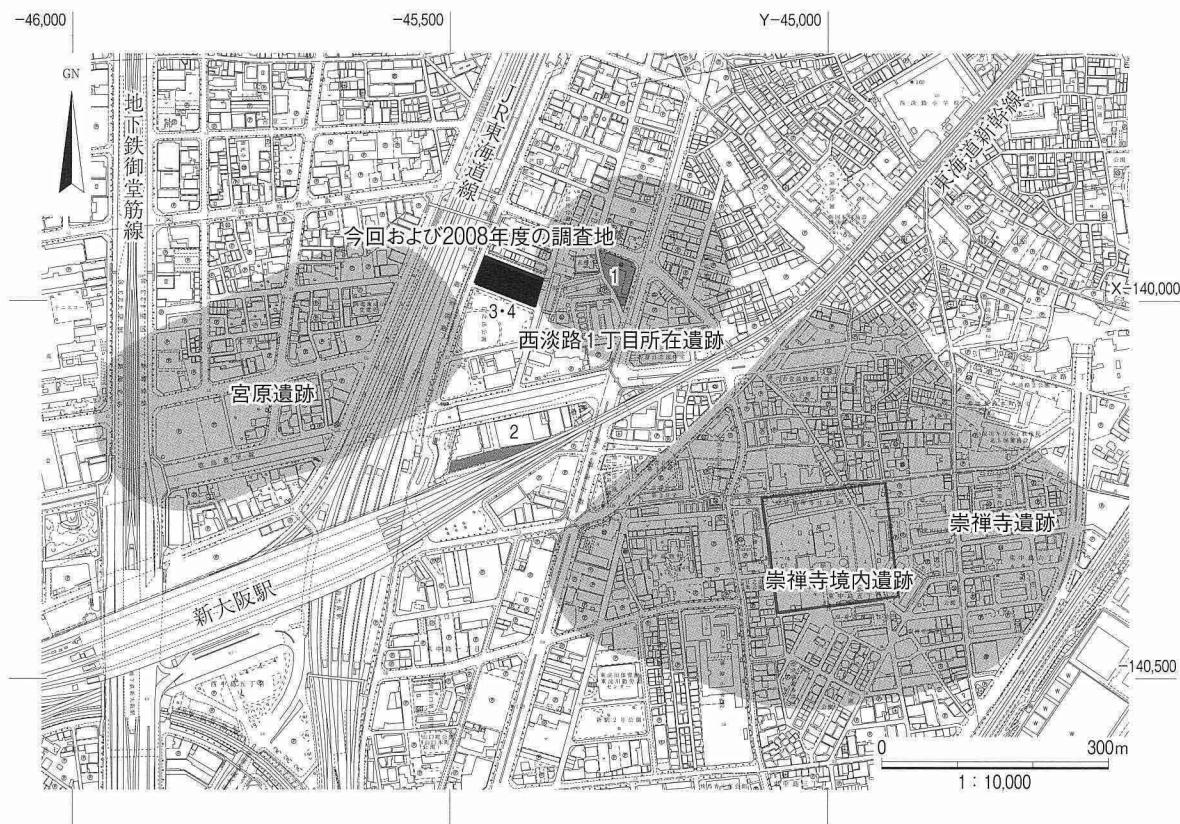


図3 周辺の遺跡と調査地

表1 本遺跡における調査一覧(試掘調査は省略した)

番号	調査次数	調査期間	面積 (m ²)	担当者	報告書	調査成果の概要
1	WA06-1	2006.7.28～8.5	90	趙 哲済	大文協・市教委2008c	・古墳時代前期～中世の遺構を検出
2	WA07-1	2007.4.2～4.26	450	高橋 工	大文協・市教委2009	・奈良時代～中世の遺構を検出
3	WA08-1	2008.12.24～2009.3.14	540	市川 創	大文協2010	・金箔瓦の出土 ・中世後期以降、耕作地となる
4	WA10-1	2010.12.17～2011.2.28	325	尾上 実	本書	・平安時代中期の土壌を検出 ・中世の自然流路を検出ほか

※1：番号は図3中に示したものと対応している。

※2：報告書発行者については、財団法人大阪市文化財協会を「大文協」、大阪市教育委員会を「市教委」とそれぞれ略記している。

同時期の西淡路1丁目所在遺跡および宮原遺跡を見ると、WA06-1次調査において古墳時代前期の遺物が出土しているが(図4)、検出層準は河成層であり、崇禪寺遺跡以西がまだ完全には離水していないかったことがわかる。

こうした地形的環境は古墳時代中期に至っても大きな変化を見せなかったようで、前期後半の途絶期を挟み、古墳時代中期の中心もやはり崇禪寺遺跡にある。同遺跡近辺に古墳が存在したであろうことは、近隣から出土する埴輪などからかねてより推測されてきたところであったが[大阪市文化財協会1999など]、現在の崇禪寺南側で実施された調査で古墳墳丘の崩壊土と考えられる地層とともに多

数の埴輪が検出され、残片的ながらその存在が確かめられている[大阪府教育委員会2003]。その後、宮原遺跡B地点(MH09-1次)では中世の河成層から韓式土器平底鉢が出土する[大阪文化財研究所2010]など、注目すべき成果も得られているが、上記の傾向は大きく変わらない。

その後、古墳時代後期から飛鳥時代にかけては目立った遺構・遺物は認められない。この地域で再び活発な人間活動が認められるのは、奈良時代のことである。この時期に至り西淡路1丁目周辺はようやく安定したようであり、WA07-1次調査において井戸などが検出されている(図5)。現状ではこの井戸を除き古代における目立った知見は得られていないが、地籍図や航空写真などをもとに条里地割を復元し(図6)、これが中世以前に遡るとする指摘があることに留意しておく必要がある[服部昌之1988]。

その後、平安時代中期から後期にかけて宮原遺跡を中心に遺構の形成が進む。この時期の宮原一帯には「宮原庄」が

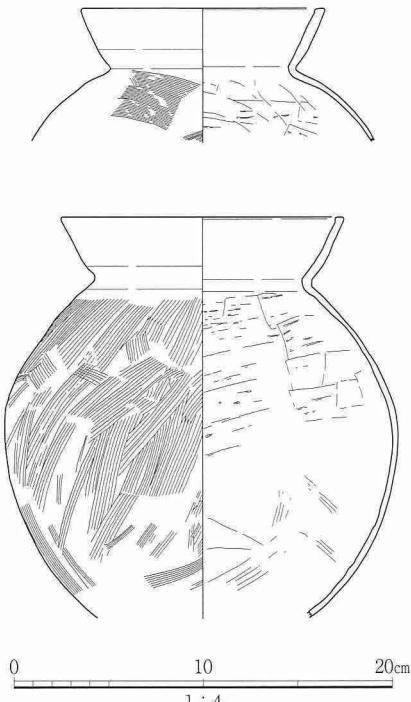


図4 WA06-1次調査出土の古式土師器
(図3-調査地1)

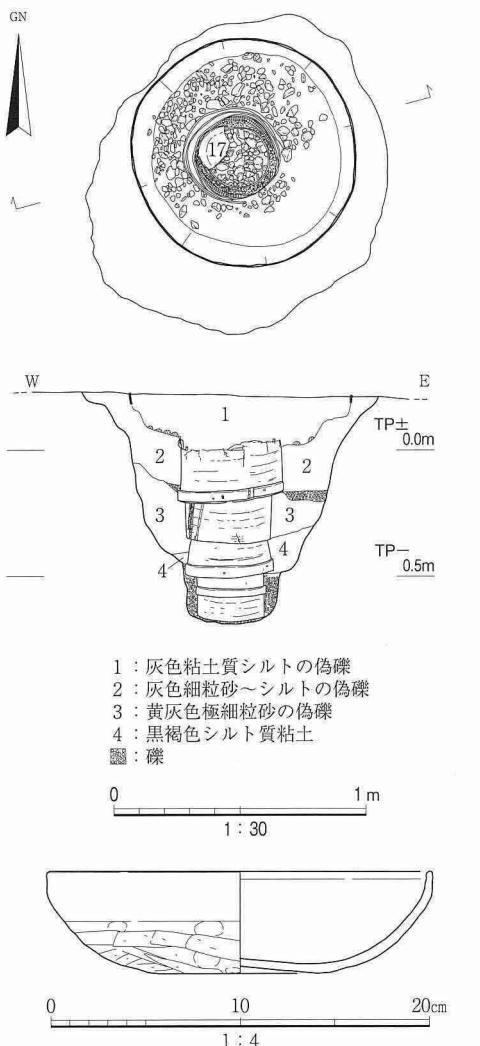


図5 WA07-1次調査SE25および出土遺物
(調査地2)

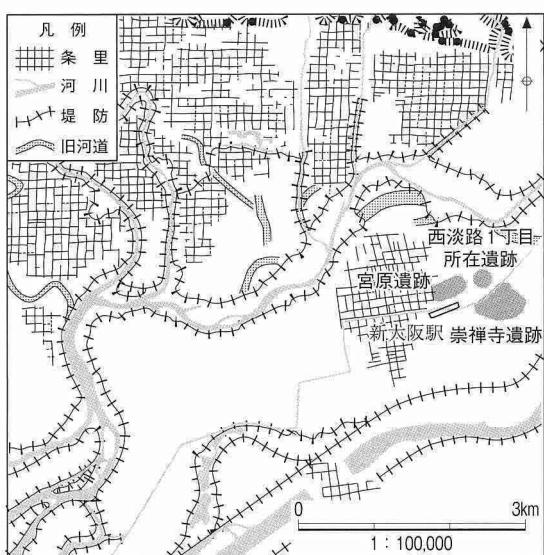


図6 大阪市北部と周辺の条里地割
([服部昌之1988]所収図を一部改変・追加してトレース)

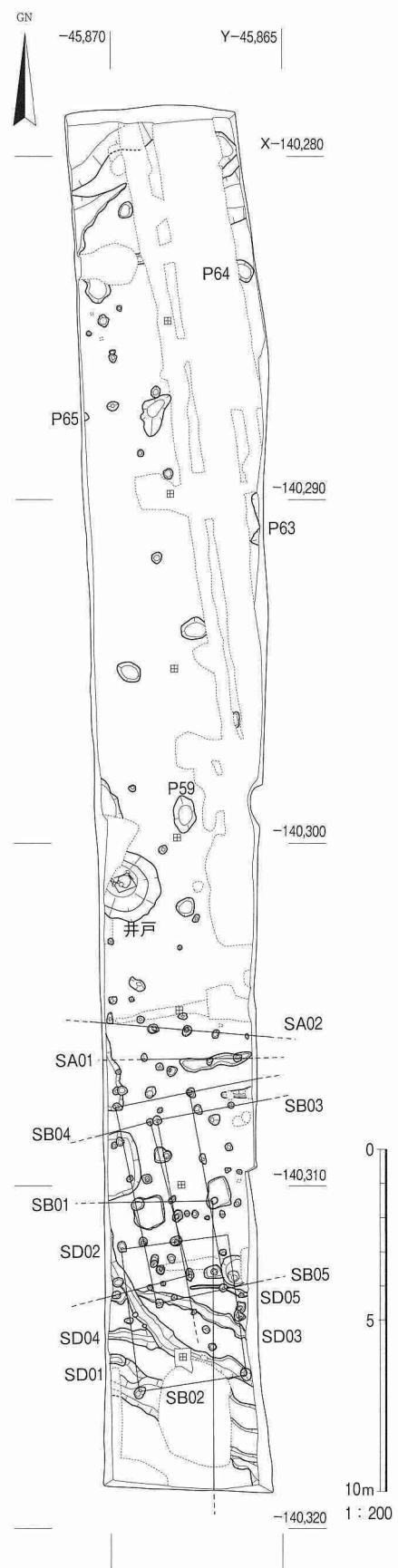


図7 MH94-2次調査第2面の遺構
([大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996])

第Ⅰ章 遺跡周辺の地形と歴史

存在し、奈良西大寺をはじめとする権門寺社の所領が入組んで存在したようである[平凡社地方資料センター編1986]。この時期の遺構としてはMH94-2次で建物・柵などが重複して検出されているほか(図7) [大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1996]、西淡路1丁目所在遺跡においてもWA07-1次でこの時期の遺構が検出されており、文献史料に見える宮原庄の具体相を示している可能性がある。また瓦器碗の産地組成について、淀川以南の大阪市域ではほぼすべてが和泉型の製品で占められるのに対し、当地周辺では樟葉型瓦器碗が少量ながら出土する(MH06-2次[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008b]など)。中世前期において淀川を挟んでやや異なった流通体系が存在した可能性があり、興味深い。

南北朝期に入る頃には、宮原庄には春日社・興福寺の支配力が増し、あるいは宮原北庄と南庄に区分されながら存続している。また南北朝期の動乱の中で武士勢力の侵略、これに対する農民層の抵抗が激化し、そうした拮抗の記録が残っている。その後、1442(嘉吉2)年には崇禪寺が建立されており、寺領を集積していく。ただし1573~1592年の天正年間には、戦乱の兵火により諸堂宇が消失したという。こうした状況を反映して、崇禪寺遺跡で再び人間活動の痕跡を認めることができる。当該期の崇禪寺に係わる遺構として、大阪府教育委員会調査地における二重の大溝の検出がある。溝の斜面部には柵跡と目される柱穴が検出されており(図8)、崇禪寺域を画する防御的施設である可能性がある[大阪府教育委員会2003]。

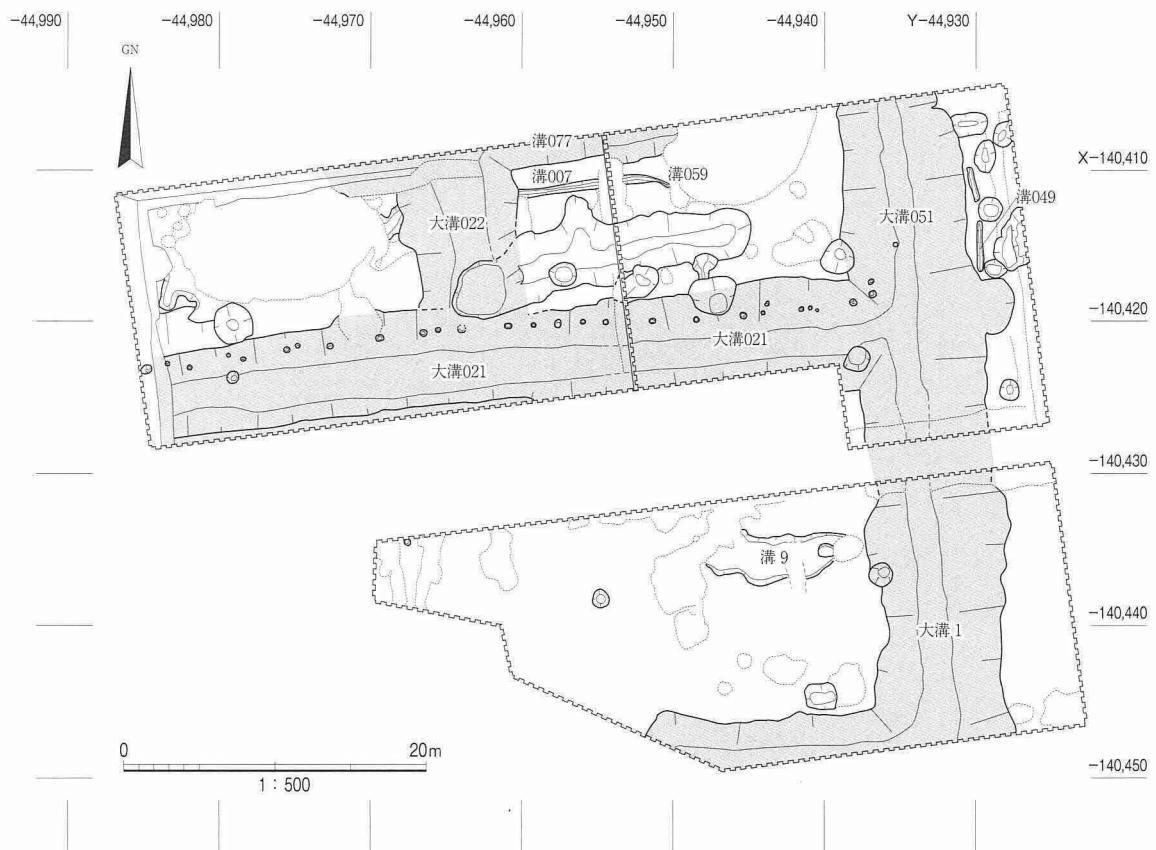


図8 崇禪寺南方の中世後期大溝
([大阪府教育委員会2003]所収図をトレイスして転載)

周辺地域において耕作地としての開発が拡がっていくのもこの時期とみられる。本調査地の東隣地で行ったWA08-1次調査では、第4層上面において、水田畦畔が検出されており、その年代は地層から出土した土器から15世紀代である(図9) [大阪市文化財協会2010]。それより下位層には性格のわからない土壙があるものの、明確な開発の痕跡は見られない。

また江戸時代においては、淀川による度重なる洪水があったことが記録に残っており、その対策と

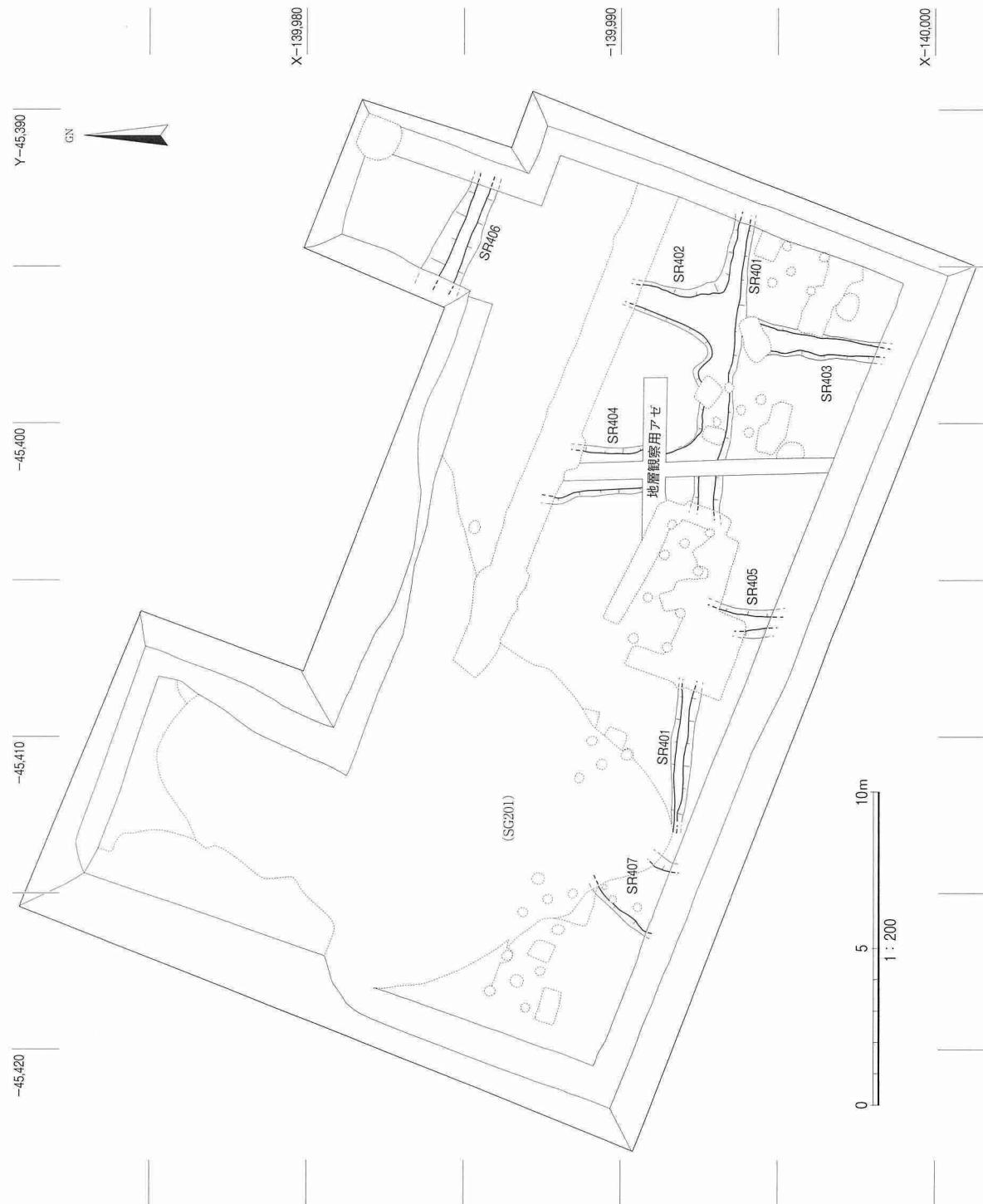


図9 WA08-1次調査第4層上面の遺構

(調査地3)

第Ⅰ章 遺跡周辺の地形と歴史

して淀川から神崎川への排水を企図して逆川が掘削されたこと、しかしながら功を奏さずむしろ洪水が頻発したことなどが伝わっている。ただし、そうした条件を次第に克服しながら、耕作地の開発が進んでいったことがいくつかの調査例からうかがえる。WA08-1次調査で検出した、溜池や鋤溝群はこうした営みを示す遺構である。

このように、当地における人間活動は淀川水系の動きと密接に関係しながら推移したものと評価できる。そして、こうした淀川の沖積作用による陸地化と人間活動の相関を考える上で、当地における考古学的調査が重要な役割を果たしている。

第Ⅱ章 発掘調査から報告書刊行に至る経緯と経過

第1節 発掘調査に至る経緯

前章で述べたとおり、西淡路1丁目所在遺跡は、古墳時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。大阪市東淀川区の西部、新大阪駅の北側に位置しており、南には淀川、北には神崎川が流れる。

このたび大阪市都市整備局によって、日之出住宅の建設工事が行われることとなった。これを受け、すでに敷地の東半部はWA08-1次調査として2008年に発掘調査が実施されている。その結果、水田畦畔や溜池など農耕関係の遺構の検出により、中世後期以後は農業生産域として機能していたことが判明した。また、豊臣期(16世紀末～17世紀初)の金箔押しの瓦も出土しており、淀川以北では市内初の出土例として注目された[大阪市文化財協会2010]。これに引き続き、西隣接地について実施したのが今回の発掘調査である(図10)。

大阪市教育委員会と同都市整備局との協議の結果、発掘調査および報告書作成作業を、財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所に委託して実施することとなった。調査個所および予定面積は以下のとおりである。

調査個所 大阪市東淀川区西淡路1丁目6-1

調査面積 約350m²

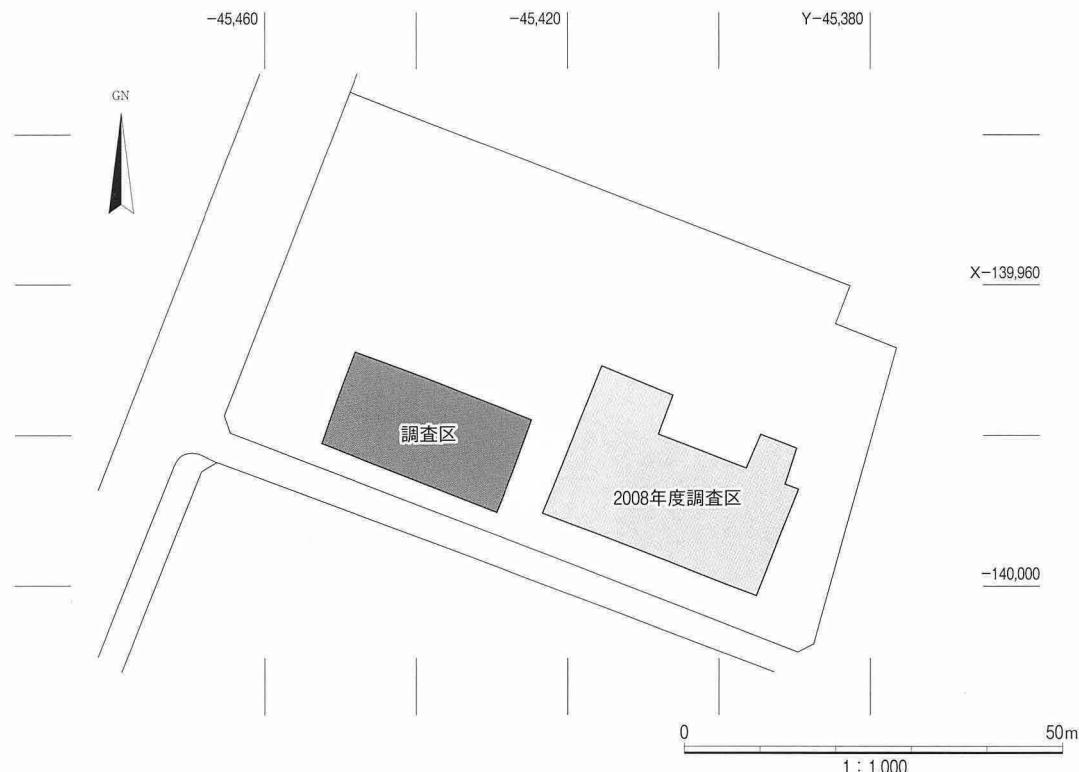


図10 調査区の配置

第2節 発掘調査および報告書作成の経過

1) 発掘調査の経過

発掘調査は、2010年12月17日から調査地の周辺整備といった準備工を開始した。2010年12月24日には大阪市教育委員会の指示に基づいて、東西25m、南北13m、面積325m²の調査区を設定し、近・現代の表土・作土(次章第1節における第0・1層)について重機を用いた掘削を開始した。掘削に際しては、壁面が崩落しないよう充分な傾斜を確保しつつ法面を整形した。

2011年1月7日からは、江戸時代以下の地層について人力による掘削を開始した。地層の掘下げ作業では遺物の出土に注意しつつスコップなどを使用した。遺構の検出が予想される面に至ったのちは、園芸用両刃鎌などを使用して検出面を精査し、遺構・遺物の検出に努めた。検出された遺構は移植コテなどを使用して注意深く掘削し、遺構ごとに遺物を取り上げた。

遺構・遺物および地層の断面は、写真撮影や平面・断面実測図の作成を適宜行い、記録した。実測に用いた図根点は世界測地系に則った基準点測量によって設置し、測量用の基準点は現場の状況に即して適宜に打設した。2月15日には最終調査面を対象にクレーンを用いた空中写真測量を行った(写真1)。2月21日には上記の人力掘削作業および実測図作成などの記録作業を終了した。

翌2月22日からは埋戻し作業を始め、2月28日には埋戻し・撤収などを終了し、すべての現場作業を完了した。



写真1 空中写真測量の作業状況

2) 報告書作成の経過

発掘調査で出土した遺物については、すべて大阪文化財研究所難波宮調査事務所に持ち帰り、洗浄作業などを行った。これら洗浄・注記・接合などの基本的な遺物整理作業を終えたのち、7月には同研究所東淀川調査事務所に写真・図面などの記録資料や遺物を移動させ、遺物の実測作業および遺構・地層などに係るパソコンコンピュータを使用した製図作業・写真図版の作成作業を進めた。遺物の写真撮影は専門のカメラマンに委託し、2012年1月下旬に実施した。

これらの作業と並行して、動物遺存体の同定を奈良文化財研究所 丸山真史氏に依頼して実施した。

こうした作業を経て、報告書の原稿作成・編集作業を行い、完成した報告書のデジタルデータ(フィルムなど一部非デジタルの媒体を含む)を、2月より外部業者に委託して印刷・製本し、2012年3月9日に完成した。

第Ⅲ章 調査の結果

第1節 層序

調査地は昭和40年代初頭に市営住宅が建設され、これに伴う盛土や基礎に伴う攪乱層が0.9~1.4mの厚さで覆っている。その下位には下記のような地層の堆積が見られた(図11~14、写真2)。

第1層：旧住宅建設時直前までの水田作土で、黒色～暗灰色の砂泥層である。層厚は8~20cmであるが、調査区西南隅部では嵩上げが行われ、層厚は35cmある。平面的には検出していないが、西壁断面中央付近と北壁断面東寄りには畦畔の高まりが見える。これを結んだ線は、下位層で確認された農耕関係遺構群とほぼ同じ方位を示し、条里に則った土地区画の痕跡であろう。

第2層：オリーブ褐色～暗灰黄色を呈する泥砂からなる。調査区東南部では層厚20cmと比較的厚いが、西北部には拡がらない。江戸時代の陶磁器・土器などの遺物を含む。以下、第7層までの各層も各時期の作土であろう。

第3層：灰オリーブ色～オリーブ褐色を呈する泥砂からなり、中世後期の遺物を含む。南半部では本層の上面で金属酸化物の沈着が著しい。こうした沈着の有無は土地利用の相違を表す可能性がある。層厚は6~15cmである。なお、第3層の上面ではところどころに薄い砂層が観察された。

第4層：オリーブ褐色～灰黄色の泥砂層である。層厚は4~10cmで、中世後期の遺物を含む。西北部の流路部分を除く全域に拡がる。

第5層：第4層を除去した第6層上面で段状遺構SX32が検出された。西北側が高く南東側が低い。この段状遺構の下段部に堆積したのが本層である。灰黄褐色の泥砂層である。段直下では層厚が14cmあるが、東へ向かうほど薄くなり、あまり広範囲には拡がらない。中世後期の遺物を含む。

第6層：段状遺構SX32の基盤となる地層で、褐色～暗灰黄色の粘土質シルトである。植物根由来とみられる金属酸化物の沈着が著しい。層厚は3~15cmで、中世の土器片を含む。

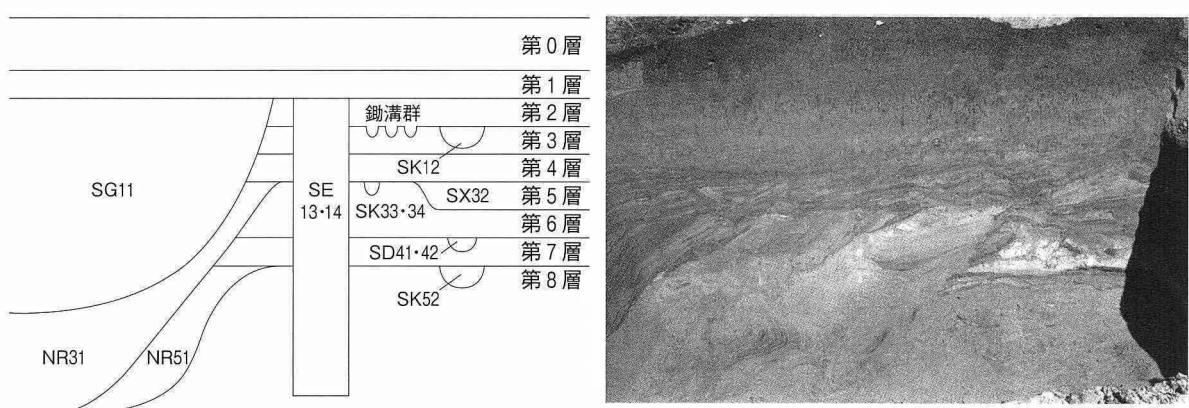


図11 地層と遺構の関係

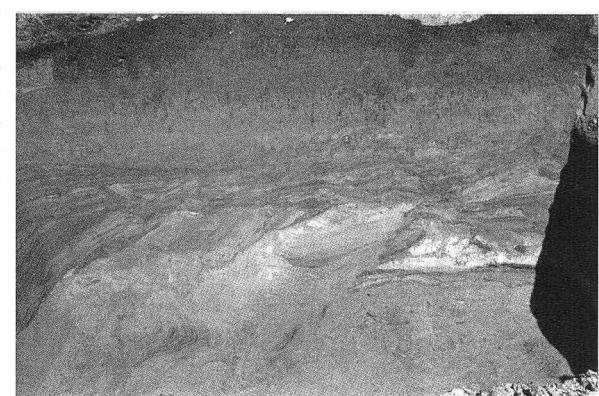
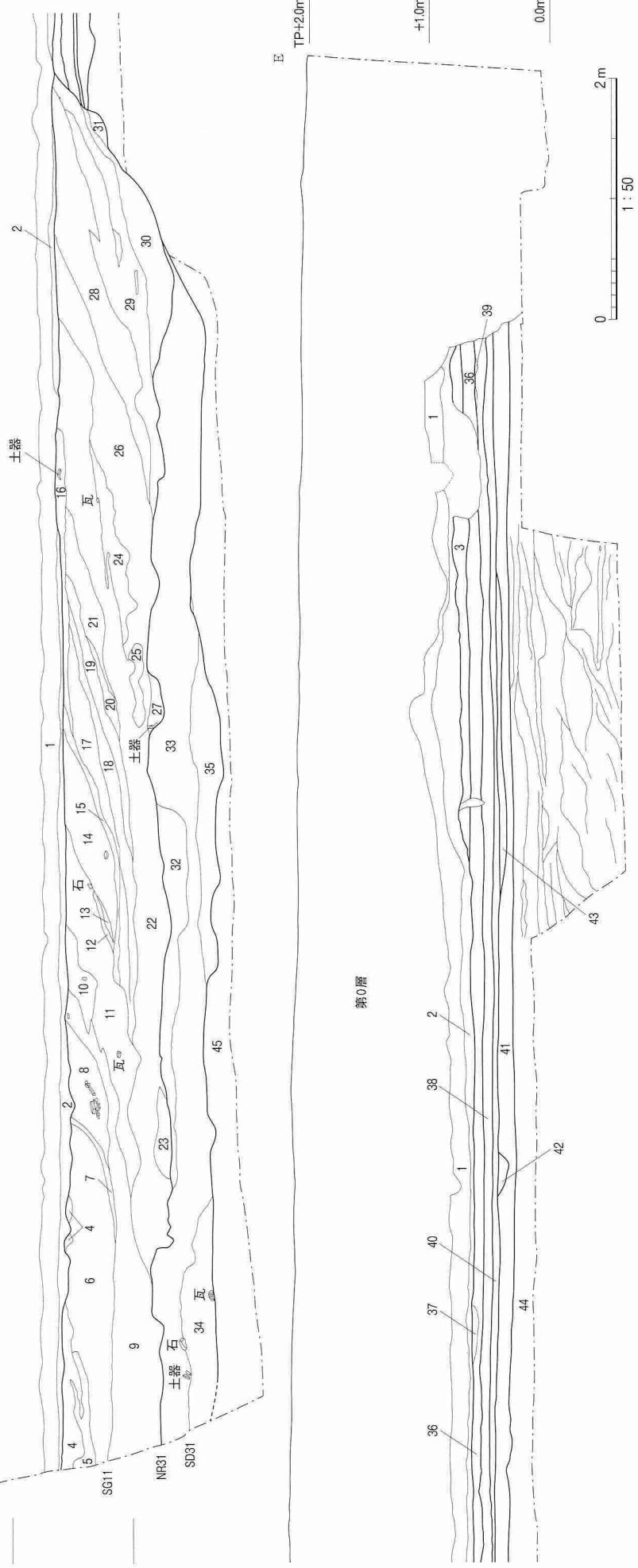


写真2 北壁深掘り部分の地層断面

W

第0層



- 1 : オリーブ黒色(5Y3/2)泥砂(第1層)
2 : 暗オリーブ色(5Y4/2)泥砂(第1層)
3 : 暗灰黄色(2.5Y5/2)泥砂(第2層)
4 : 泥土偽鱗含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)砂(SG11)
5 : オリーブ黒色(5Y3/1)泥(SG11)
6 : 暗オリーブ色(5Y5/2)細粒砂(水成 SG11)
7 : オリーブ黒色(5Y3/1)泥(SG11)
8 : 黒褐色(2.5Y3/2)泥砂(遺物特に多い SG11)
9 : オリーブ黒色(5Y3/1)泥(SG11)
10 : 暗灰黄色(2.5Y4/2)泥土(SG11)
11 : オリーブ黒色(5Y3/1)泥(SG11)
12 : オリーブ黒色(5Y3/1)泥(SG11)
- 13 : にぶい黄色(2.5Y6/3)砂(SG11)
14 : 暗灰黄色(2.5Y5/2)泥砂(第1層)
15 : オリーブ黒色(5Y3/1)泥(SG11)
16 : 暗オリーブ色(5Y4/2)泥砂(SG11)
17 : 暗オリーブ色(5Y4/2)泥砂(SG11)
18 : オリーブ黒色(5Y3/2)泥砂(SG11)
19 : オリーブ黒色(5Y3/1)泥(SG11)
20 : オリーブ黒色(5Y3/2)泥砂(SG11)
21 : オリーブ黒色(5Y3/2)泥砂(SG11)
22 : オリーブ黒色(5Y3/1)泥(SG11)
23 : 暗褐色(5Y4/1)細粒砂(水成 SG11)
24 : オリーブ色(5Y6/2)砂(SG11)
- 25 : 暗オリーブ色(5Y6/2)砂(SG11)
26 : オリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂(SG11)
27 : 暗オリーブ色(5Y4/2)細粒砂(SG11)
28 : オリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂
29 : 黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂(SG11)
30 : 暗オリーブ色(5Y4/3)細粒砂(SG11)
31 : 暗褐色(5Y3/2)泥砂(SG11)
32 : オリーブ黒色(7.5Y3/2)細粒砂(NR31)
33 : 暗オリーブ色(7.5Y4/2)砂(NR31)
34 : 暗褐色(5Y4/1)泥質細粒砂(NR31)
35 : 泥土偽鱗を含む灰色(5Y5/1)細粒砂(NR31)
36 : 暗オリーブ色(5Y6/2)泥砂(第3層)
- 37 : 灰色(10Y5/1)細粒砂
38 : オリーブ褐色(2.5Y4/4)泥砂(第4層)
39 : 暗灰黄色(2.5Y6/2)砂
40 : 褐色(10Y4/6)極細粒砂
41 : 黑褐色(2.5Y3/2)粘土質シルト(第6層)
42 : 暗灰黄色(2.5Y5/2)泥砂(SD41)
43 : 暗灰黄色(2.5Y4/2)泥砂(SD42)
44 : 暗オリーブ色(5Y4/2)泥砂(第8層)
45 : 灰色(7.5Y5/1)砂(第8層)

図112 北壁地層断面図

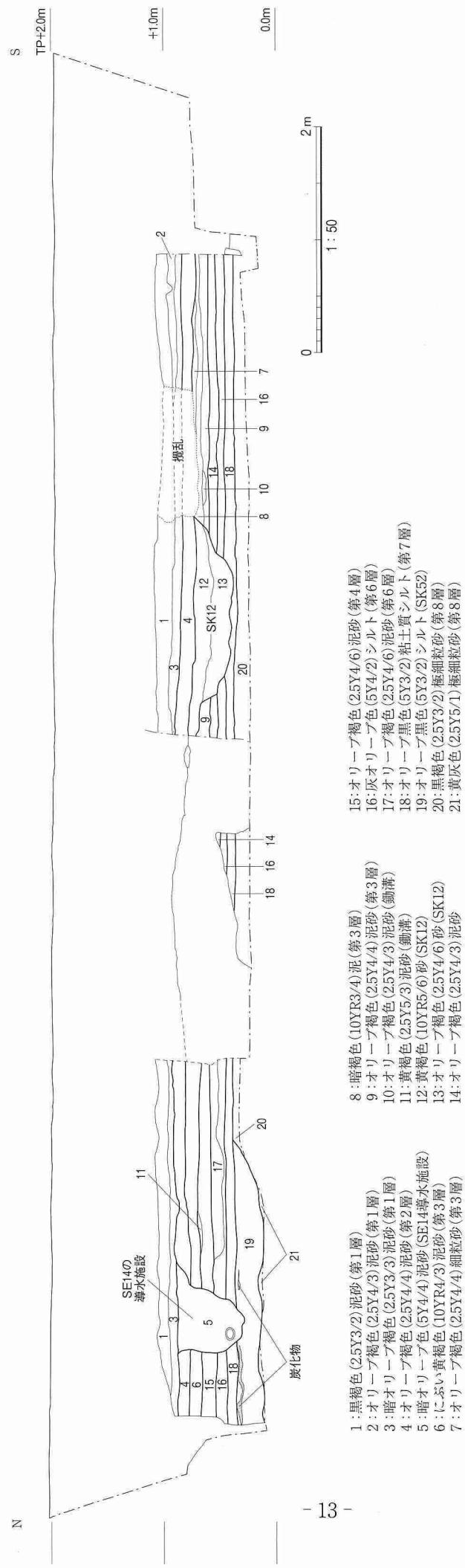
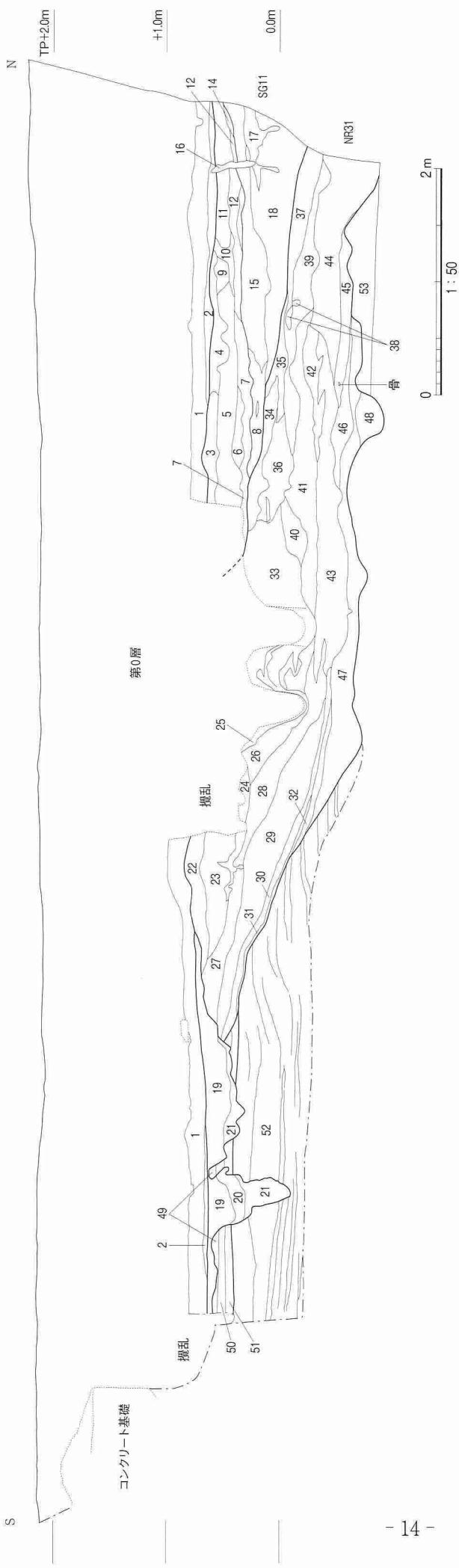


図13 東壁地層断面図



- 1: 黒褐色(2.5Y3/2)～オリーブ黒色(7.5Y3/1)砂泥(第1層)
 2: 暗灰黄色(2.5Y4/2)～オリーブ黒色(5Y3/1)砂泥(第1層)
 3: 黒褐色(2.5Y3/2)泥砂(SG11)
 4: 泥土・礫含む灰色(7.5Y4/1)泥砂(SG11)
 5: 墓色(7.5Y3/1)砂泥(SG11)
 6: 黒褐色(2.5Y3/2)泥砂(SG11)
 7: 黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂(NR31)
 8: 黒褐色(2.5Y3/2)泥(SG11)
 9: 泥土・礫含むオリーブ黒色(5Y3/2)砂(SG11)
 10: 暗オリーブ灰色(2.5Y4/1)砂泥(SG11)
 11: 泥土・礫含むオリーブ黒色(2.5Y4/3)砂(SG11)
 12: オリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂(SG11)
 13: 黄褐色(2.5Y5/3)砂(SG11)
 14: 墓色(5Y3/2)砂(SG11)
 15: オリーブ黒色(5Y3/1)泥(SG11)
 16: オリーブ黒色(5Y3/2)泥(樹根痕跡)
 17: オリーブ黒色(5Y3/1)泥(SG11)
 18: オリーブ黒色(5Y3/1)泥(樹根痕跡)
 19: 粘土・礫含む暗灰黄色(10YR4/2)砂泥(第1層)
 20: 墓黄色(2.5Y7/2)砂
 21: 粘土・礫含む暗灰黄色(2.5Y5/2)砂
 22: にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒砂(NR31)
 23: 黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂(NR31)
 24: オリーブ色(2.5Y6/3)細粒砂(NR31)
 25: 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂(NR31)
 26: 墓オリーブ色(5Y5/2)細粒砂(NR31)
 27: 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂(NR31)
 28: 墓オリーブ色(5Y5/2)細粒砂(NR31)
 29: 墓白色(2.5Y8/1)砂(水成 NR31)
 30: 墓オリーブ色(5Y5/2)細粒砂(水成 NR31)
 31: 墓オリーブ色(5Y4/2)粘土・質細粒砂(NR31)
 32: 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土質シルト(NR31)
 33: 墓色(5Y4/1)砂泥(NR31)
 34: 泥土・礫含む暗灰黄色(2.5Y5/2)砂(NR31)
 35: オリーブ黒色(5Y3/2)泥質細粒砂(NR31)
 36: オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂(NR31)
 37: 暗オリーブ色(5Y4/2)泥砂(NR31)
 38: オリーブ黄色(3Y6/3)砂(NR31)
 39: 暗オリーブ褐色(2.5Y5/2)砂(NR31)
 40: 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)泥質細粒砂(NR31)
 41: オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂(NR31)
 42: にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒砂(NR31)
 43: 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂(NR31)
 44: オリーブ黒色(5Y5/2)泥質細粒砂(NR31)
 45: オリーブ黒色(5Y3/2)泥質細粒砂(NR31)
 46: 骨・歯特に多く含むオリーブ黒色(5Y3/2)極細粒砂(NR31)
 47: 骨・歯特に多く含むオリーブ黒色(5Y3/1)極細粒砂(NR31)
 48: 有機質含む灰色(5Y4/1)極細粒砂(NR31)
 49: 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土・質極細粒砂(第4層)
 50: 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘土・質極細粒砂(第6層)
 51: 暗オリーブ色(5Y5/2)粘土・質極細粒砂(第7層)
 52: 暗黄色(2.5Y6/2)細粒砂～シルト(第8層)
 53: 有機物の薄層・疊合するオリーブ黒色(5Y4/2)極細粒砂(第8層)

図14 西壁地層断面図

第7層：オリーブ黒色～灰オリーブ色の粘土質シルトである。層厚は5～12cm程度である。中世の土器の細片を少量含む。自然堆積層の最上部が作土として耕耘されたものであろう。本調査区での作土層としては最下位のものである。

第8層：流水に伴う自然堆積層である。明瞭なラミナを伴い、シルトや極細粒砂、細粒砂などからなるが、全体に上方へ細粒化する。一部にサブトレッセを設定して掘り下げたが、遺物は確認できなかつた。

第2節 遺構と遺物

遺構面として、以下の計5面を精査した。検出した遺構でもっとも古い年代のものは後述する第8層上面のSK52であるが、遺構や地層に混入した状態で、より古い年代の遺物が出土している。ここではまず、それらについて述べたのち、続けて面的な調査成果を報告する。

1) 奈良時代以前の遺物

遺構や地層に混入した状態で出土した遺物のうち、製塩土器1、須恵器杯蓋2・3・高台付杯4・5・壺6を図示した(図15、図版11)。

製塩土器1は口縁部外面を平行タタキで成形し、体部外面はケズリ調整である。内面には平行の当具痕が見られる。胎土に1mm以下の砂粒を多く含む。弥生時代終末期の頃のものと考えられる。NR51の底部から出土した。杯蓋2は古墳時代後期、6世紀後半の年代が与えられる。NR31から出土した。3は7世紀中頃のものである。第4層から出土した。高台付杯4・5および壺6は底部のみが残存する。いずれも8世紀代のものである。4・6はNR31、5は第4層から出土した。

今回の調査では当該期の遺構は検出されていないが、上記の遺物は調査地周辺に同時代の集落が存在する可能性を示している。

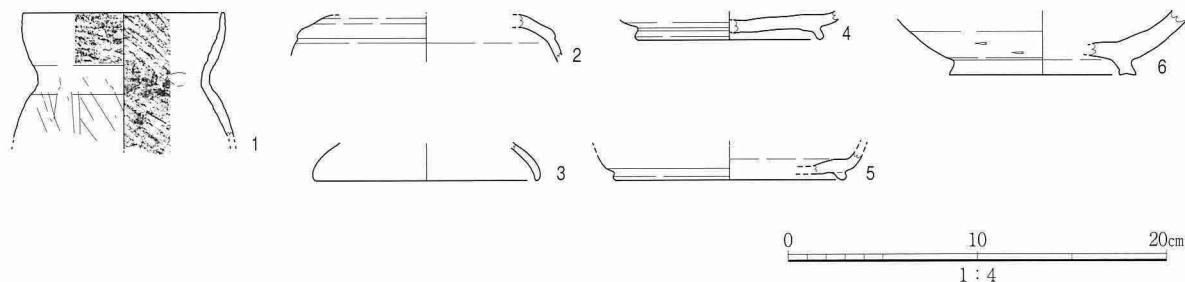


図15 奈良時代以前の出土遺物実測図
NR51(1)、NR31(2・4・6)、第4層(3・5)

2) 平安～室町時代の遺構と遺物

i) 第8層上面

第8層は自然堆積層で、自然堤防状の堆積とみられる。部分的な深掘りによっても遺物は確認されていない。その上面で土壙SK52と自然流路NR51を検出した(図16、図版1・2)。

SK52

調査区の東北隅で検出した土壙である。2.5×1.3mほどの範囲を調査したが、東・北ともに調査区外に延びていたために全形は不明である。断面形状は深さ0.23mの鍋底状を呈するが、底面にはかなりの起伏が認められる。埋土はオリーブ黒色シルトで、埋土上面近くの2箇所に炭化物の薄い層が観察された。土壙内からは3箇所に分かれて黒色土器A類・B類の碗、土師器皿などが出土したが、いずれも埋土の中段から上部にかけての埋没である(図17)。

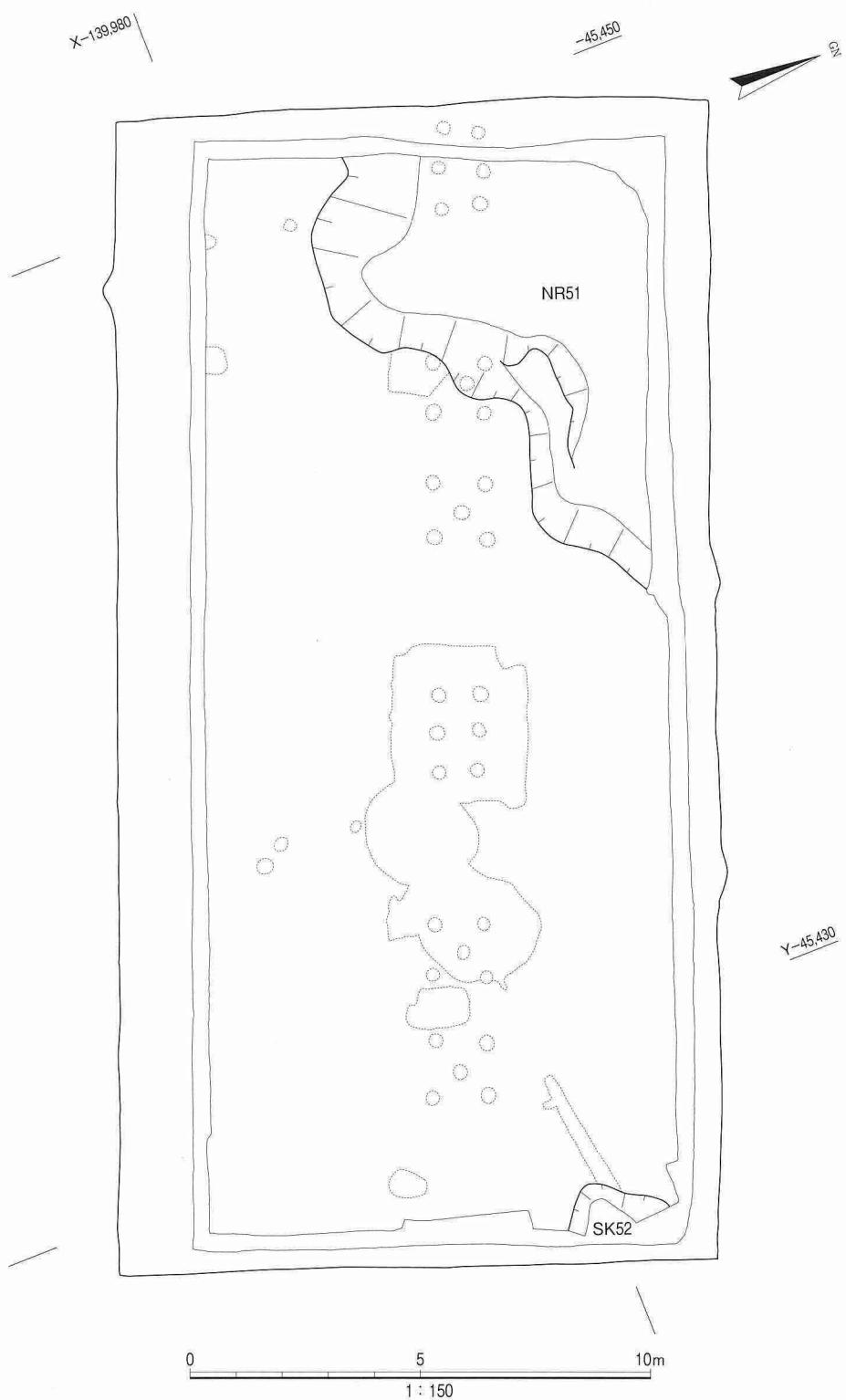


図16 第8層上面遺構平面図

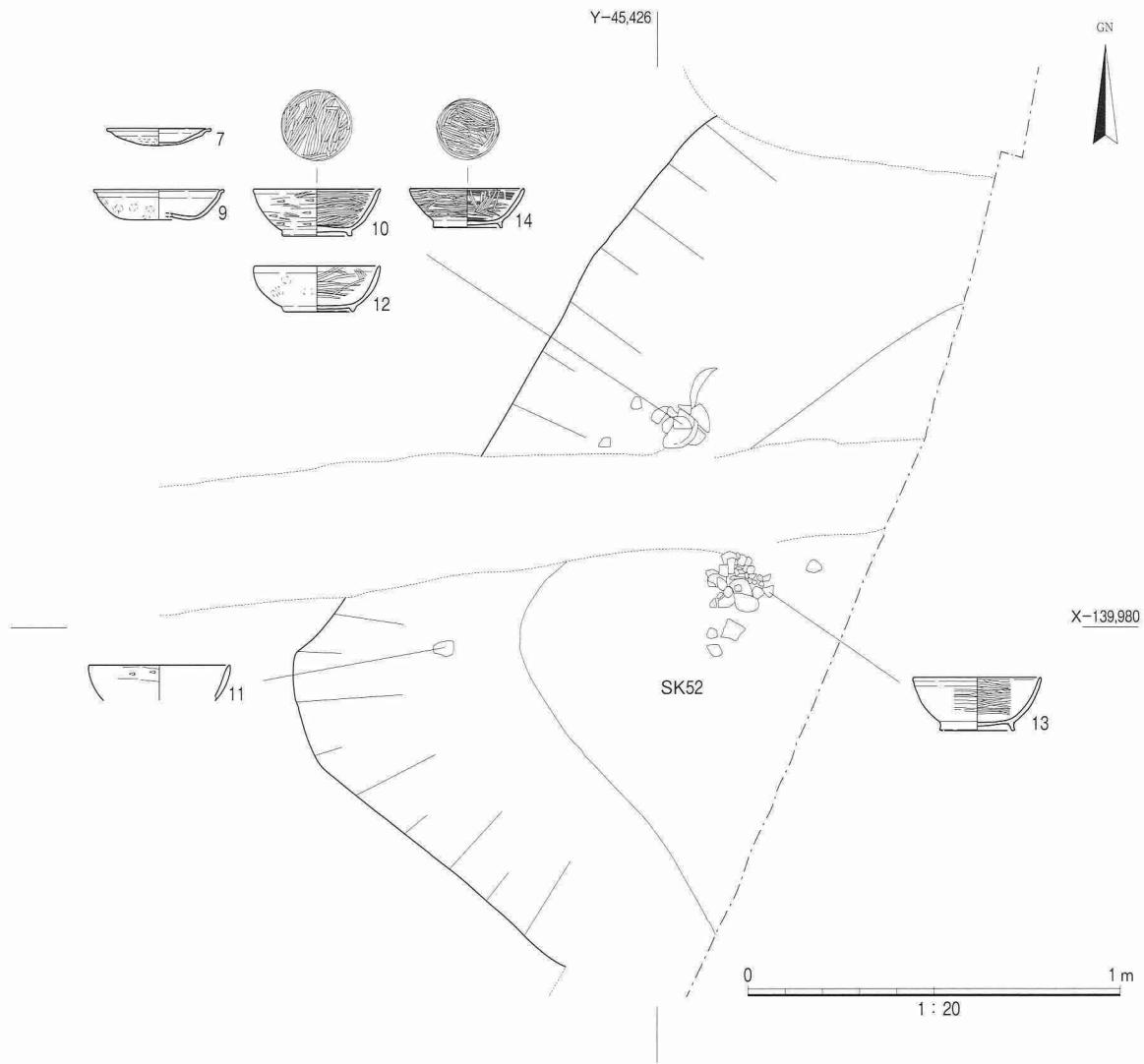


図17 SK52遺物出土状況図

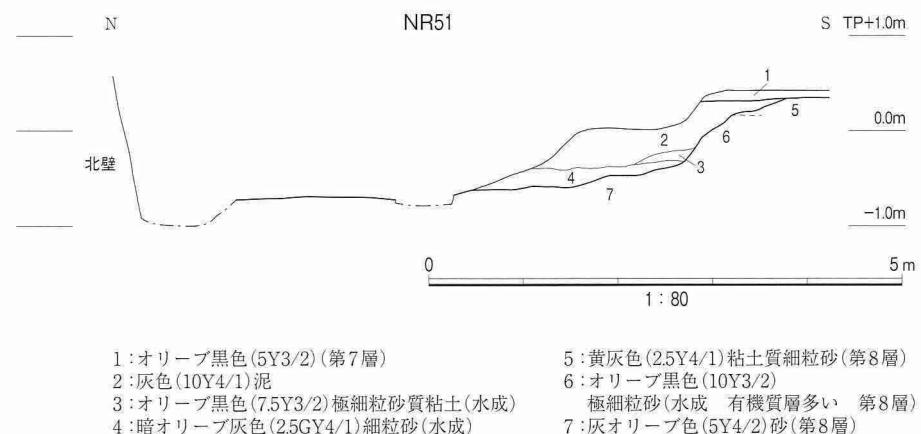


図18 NR51の地層断面図

出土遺物のうち、土師器皿7～9、黒色土器A類碗10～13・B類碗14・15を図示した(図19、図版11・12)。

土師器皿7・8はいわゆるての字状口縁の皿である。にぶい橙色～灰黄色の精良な胎土である。9は口縁が外反する皿で、端部を折り返さない。7・8と同様の精良な胎土である。黒色土器A類碗10・12はほぼ完形に接合できた。13は接合しないが同一個体と考えられる口縁部片と底部片から全形を復元した。同じくB類碗14は完形に接合できた。15も13と同様に口縁部片と底部片から全形を復元した。10の外面のヘラミガキは13・14に比べるとやや疎らである。11・15の内外面、12の外面は器表が風化しており、ヘラミガキなどの調整は観察できない。これらの年代は、土師器皿の点数が少ないので細かくは絞り込みにくいが、口縁部が外反する土師器皿が現れており、まだ厚手化する前であると考えれば、黒色土器のA類・B類の碗の形態からみても、平安京における平尾政幸氏の編年における3-C [京都市埋蔵文化財研究所2003]にほぼ相当し、平野区の長原遺跡における編年の平安時代Ⅲ期古段階[佐藤隆1992]に併行する時期であろう。暦年代は10世紀末～11世紀初頭である。本調査地で確実な遺構としてはもっとも年代の遡るものである。次に報告するNR51の灰釉陶器碗23もほぼ同時期に属する資料である。

NR51

調査区の西北部で検出した、東から西へと流れる流路である。後代に踏襲されているため、当該期

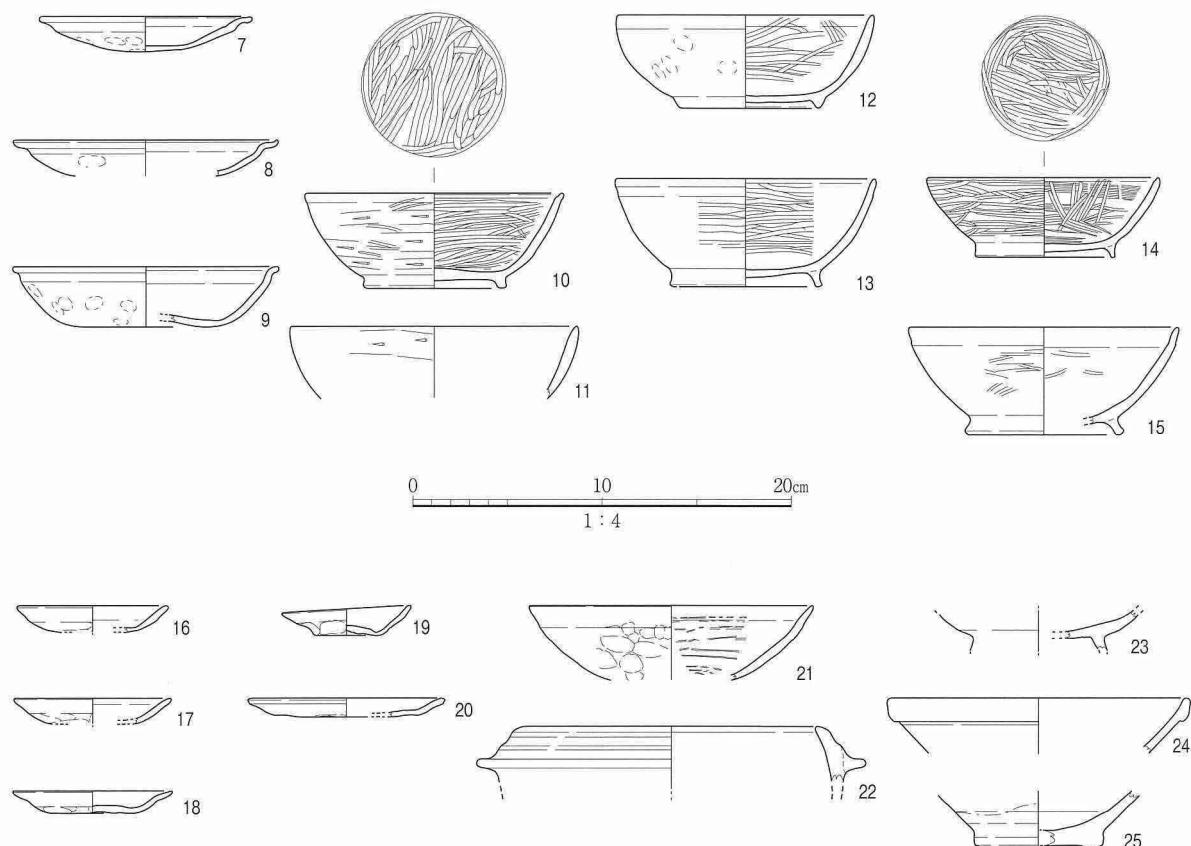


図19 SK52 · NR51出土遺物実測図

SK52(7～15)、NR51(16～25)

第Ⅲ章 調査の結果

の遺構として確認されたのは、南へ大きく湾入した部分のみである。深さは0.9~1.0mである。青灰色~暗灰色の泥を基調とするが、底面近くでは砂層に移行する(図18、図版12)。出土遺物は泥層には少なく、多くは底面近くの砂層から出土した。瓦器など、中世に属するものが多いが、弥生時代に遡る摩耗した破片も少量含まれる。少量ではあるが、動物遺存体の出土も確認している。

なお、最下位層の作土である第7層は、このNR51の南方湾入部の上を覆って堆積していることが、断面観察用のアゼで確認されている。

出土遺物として、土師器皿16~20、瓦器碗21・三足釜22、灰釉陶器碗23、中国産白磁碗24・25を図示した(図19、図版12)。土師器皿16~20、口縁部および体部が外方へ開く形態である。このうち、19は底部が上方へ盛り上がる、いわゆるへそ皿である。天神橋遺跡TJ00-2次調査出土資料[大阪市文化財協会2002]と比較して14世紀中頃~後半の年代が与えられる。ほかの16~18・20は13世紀代のものであろう。瓦器碗21は体部内面のヘラミガキが疎らで、13世紀前半のものである。三足釜22は13世紀中頃~後半の瓦器碗に伴うものである。中国産白磁碗24・25は横田賢次郎・森田勉氏による分類の碗IV類[横田・森田1978]である。

以上の土器・陶磁器のうち、土師器皿19が最も新しい年代のものであり、この自然流路の埋土の年代が14世紀後半頃を下限とすることを示している。

ii) 第7層上面

第6層を掘り下げた面で、2条の溝SD41・42が検出されたほか、前代のNR51を踏襲した流路が継続して流れていたであろう。2条の溝は並行して東西方向に直線的に延び、その方位は北で西に約8°振れている(図20、図版3)。

SD41

幅0.25~0.40mの溝で東西方向に延びる。延長約9mにわたって検出されたが、西端は攪乱により削平されている。断面鍋底状で深さは0.05~0.06mである(図21、写真3)。埋土はオリーブ黒色の泥砂である。土師器・瓦器の細片が出土したが、図化しえなかった。

SD42

東西方向に延びる。幅は最狭部で0.9mであるが、本来は幅1.6mで直線的に延びる溝であろう。最深部で0.10mの鍋底状を呈する(図21、写真4)。埋土は暗灰黄色砂泥である。須恵器・瓦器の細片が出土したが、図化しえなかった。

iii) 第6層上面

作土層である第4層を除去すると、調査区西北部で前代を踏襲した自然流路NR31が認められたほか、東西方向に延びる段状遺構SX32と2基の小土壙SK33・34が検出された(図22、図版4~7)。

NR31

前代より続く自然流路(NR51)を踏襲する。深さは1.2~1.5mである。埋土は細粒砂や極細粒砂を中心とし、ところどころに泥の堆積が見られる。緩やかな流水に伴う堆積とみられるが、底面は凹凸が著しく、この部分には細礫や粗粒砂なども見られる。東からの流れが南岸を浸食して、大きく湾入して青灰色の極細粒砂や細粒砂が堆積しており、この部分の傾斜面から底面にかけて、かなり多量の動物

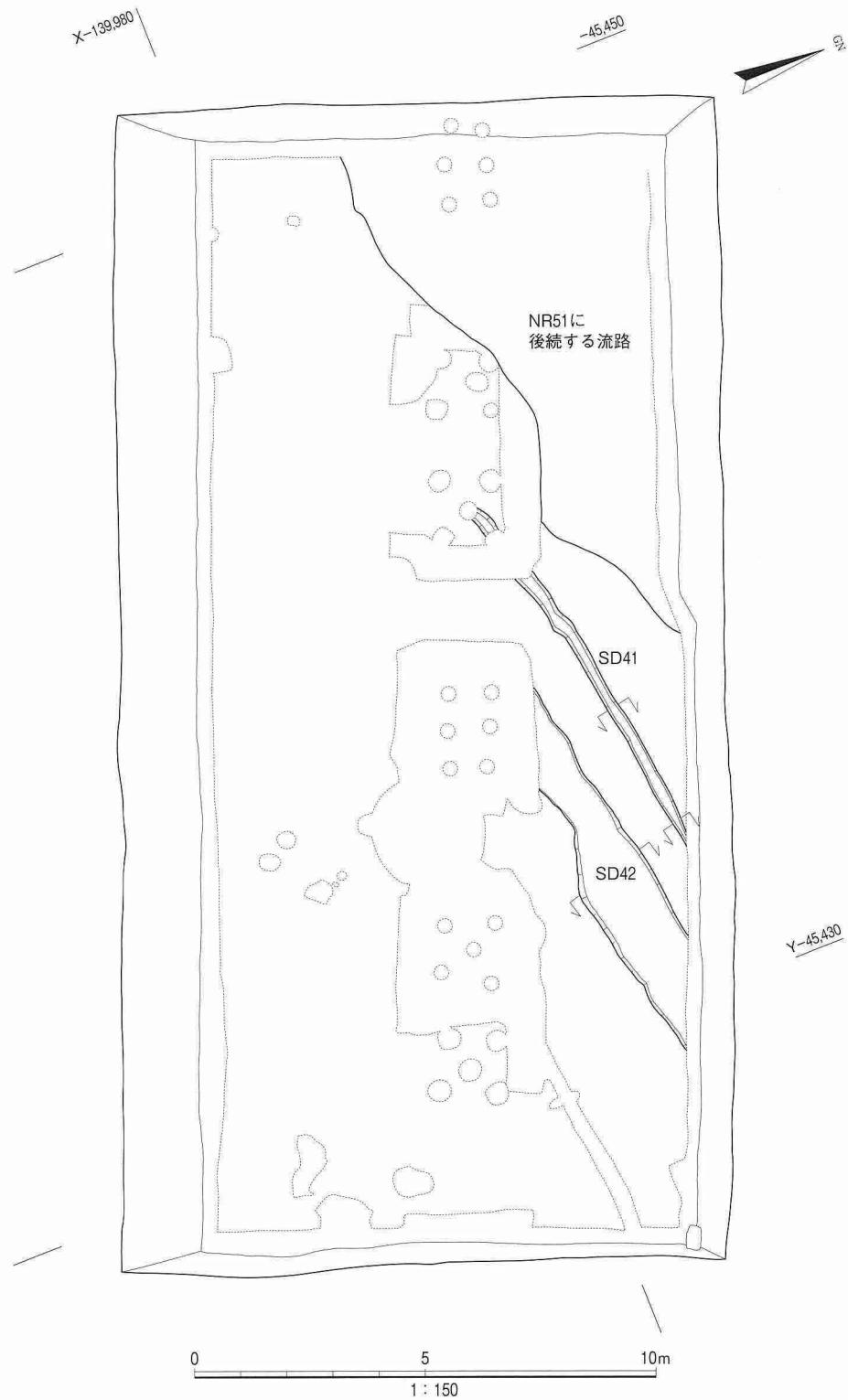


図20 第7層上面遺構平面図

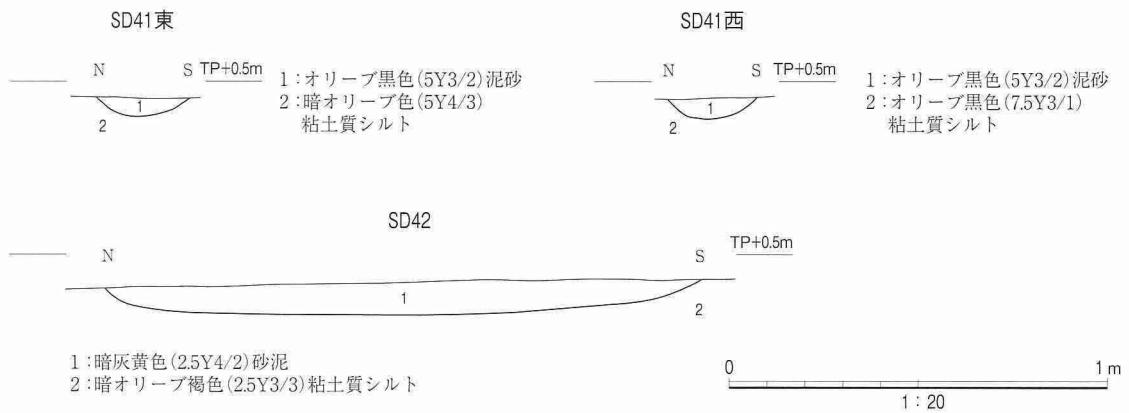


図21 第7層上面遺構断面図

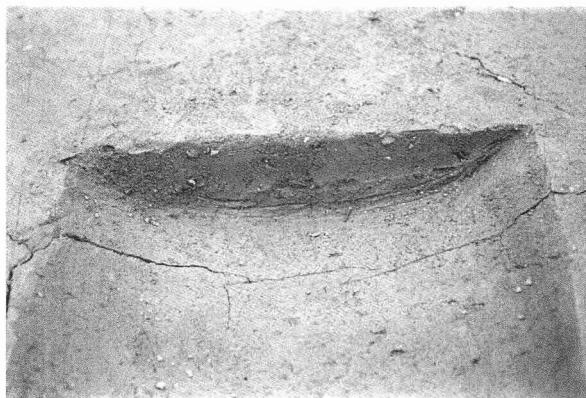


写真3 SD41(西から)

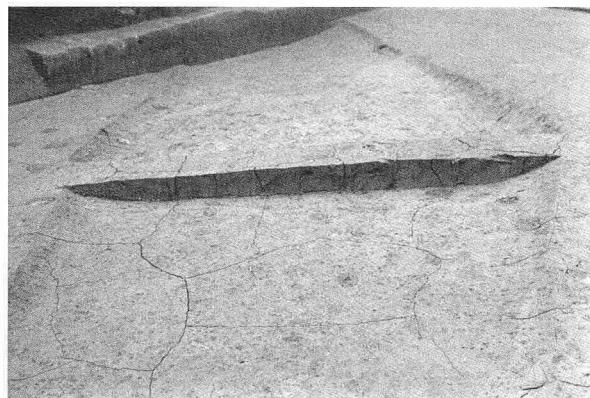


写真4 SD42(西から)

遺存体が含まれていた(図版5～7)。骨は繋がった状態ではなく、解体された後の残滓だけが流路の南岸から投入されたものであろう。多くは細片であり、かつ遺存状況が良くはなかったが、そのなかでも出土状態を保ったまま取り上げることができたものを中心に、詳細を本章第3節で報告する。現地での観察ではいずれもウマの中足骨、下顎骨、上腕骨、歯が確認できた(大阪府教育委員会 宮崎泰史氏のご教示)。なお、本調査地における動物遺存体は、このNR31だけでなく、最下位の遺物包含層(作土層)である第7層や、第8層上面で検出したNR51からも少量ずつではあるが出土が確認されている。

動物遺存体のほかには土器・陶磁器なども出土している。これらの遺物はかなりの年代幅をもつが、動物遺存体はこれらのうち最も新しい年代のものに伴うのであろう。

出土した土器・陶磁器のうち、土師器皿26～30、瓦器碗31～33・皿34、瓦質土器羽釜39・41・擂鉢40、中国産白磁碗または皿36、青磁碗35・37・皿38、備前焼擂鉢42～44、常滑焼甕45を図示した(図24、図版13)。土師器皿26～30は、12世紀以前に遡る26をのぞけば、口縁部および体部が外方へ開く形態であり、先に報告したNR51の皿よりもやや深いものが多い。14～15世紀の特徴をもっている。瓦質土器羽釜39・41・擂鉢40は、羽釜の口縁部が内傾しており、擂鉢の口縁部下端が外へ突出していることから、これらは15世紀代の特徴をもつ。中国産白磁碗または皿36は森田勉氏のD類である[森田1982]。青磁碗35は口縁部が外反する無文の碗である。37は蓮弁文碗の底部である。皿38は底部内面に花文の印刻がある。備前焼擂鉢42は口縁部の縁帶の断面形が三角形に近くあまり上方に延びていないことから15世紀前半頃のものであろう[佐藤隆1996]。43は口縁部の縁帶が上方に延びるが、

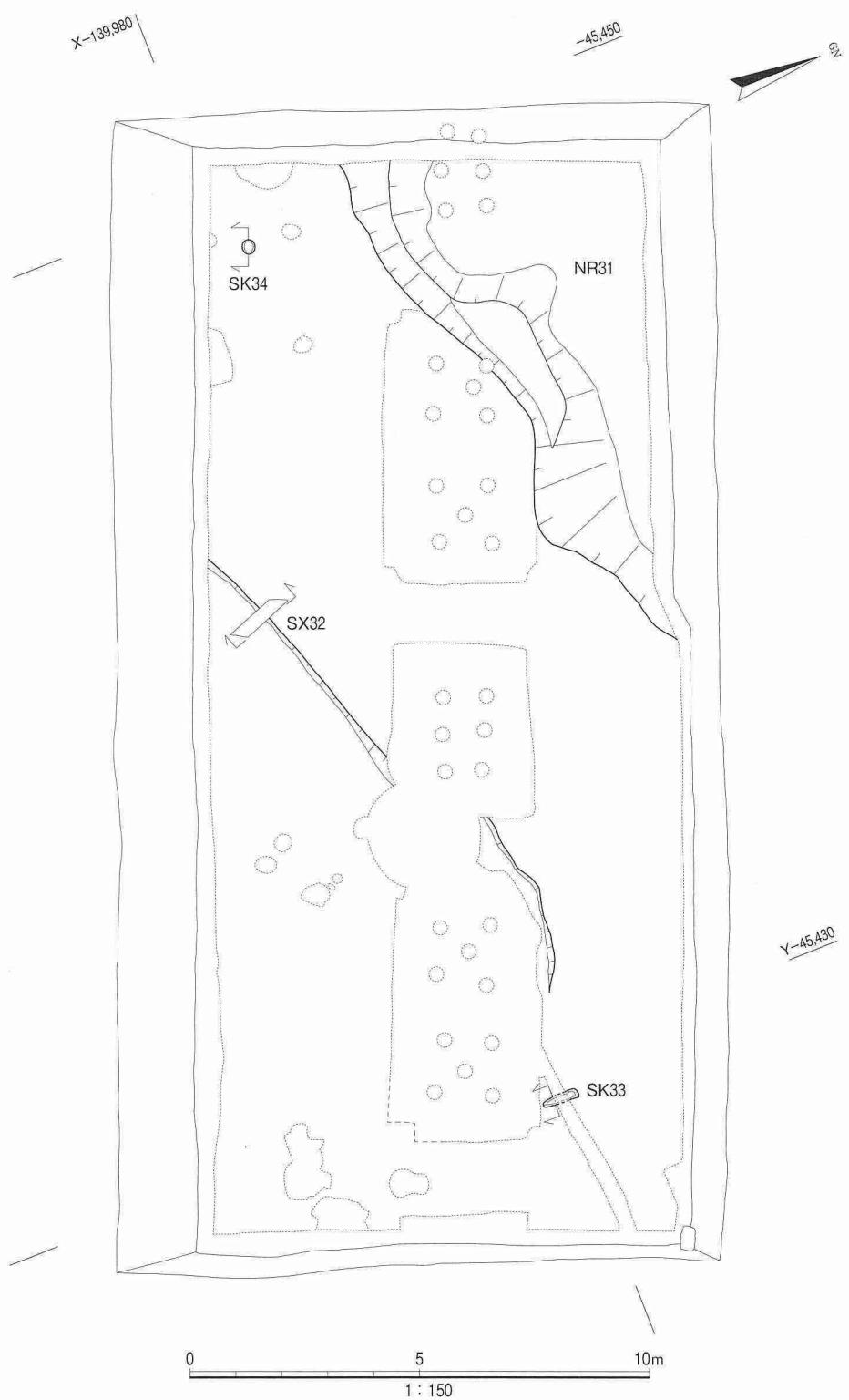


図22 第6層上面遺構平面図

第Ⅲ章 調査の結果

端部に面をもたず丸くおさめている。15世紀後半のものである。

以上のことから、この自然流路の埋土の下限年代は15世紀後半頃と考えられる。

SX32

調査区の中央南寄りにおいて、西南西から東北東に向って直線的に続く段状遺構である(図23、図版4)。北西側が高く、南東側が低い。高低差は0.05~0.16mである。攪乱を超えた東北側にもやや屈曲した低い段差が見られ、これも段状遺構の延長と見られるが、住宅の基礎工事や井戸に係わる地層の乱れの可能性もある。段状遺構の北側の基盤層は第6層で、南側の落込んだ面上に堆積したものが第5層である。この遺構は下位のSD41・42や上位の江戸時代の鋤溝とはその方位がやや異なるが、これも同様に圃場区画に係わるものであろう。

出土遺物として、土師器皿46・羽釜48、瓦器椀47を図示した(図24、図版13)。土師器皿46は口縁部・体部が斜め上方に開く形態である。羽釜48は口縁部の形態から12世紀後半頃の年代が与えられる。瓦器椀47は小破片であり、口縁部径を復元できないが、断面の形態から13世紀頃のものであろう。

SK33

長さ0.80m、幅0.20mの長楕円形の土壙で、中央部をSE14の導水施設によって切られている。断

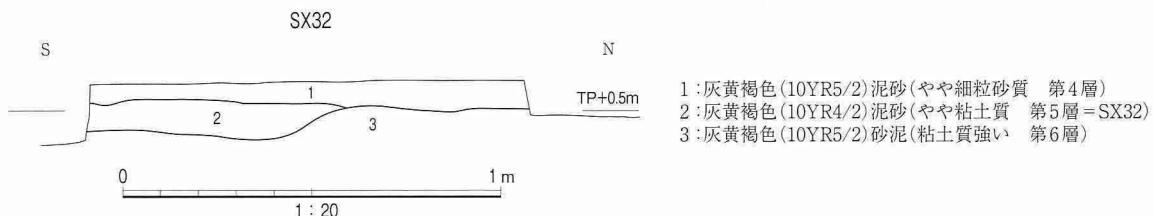
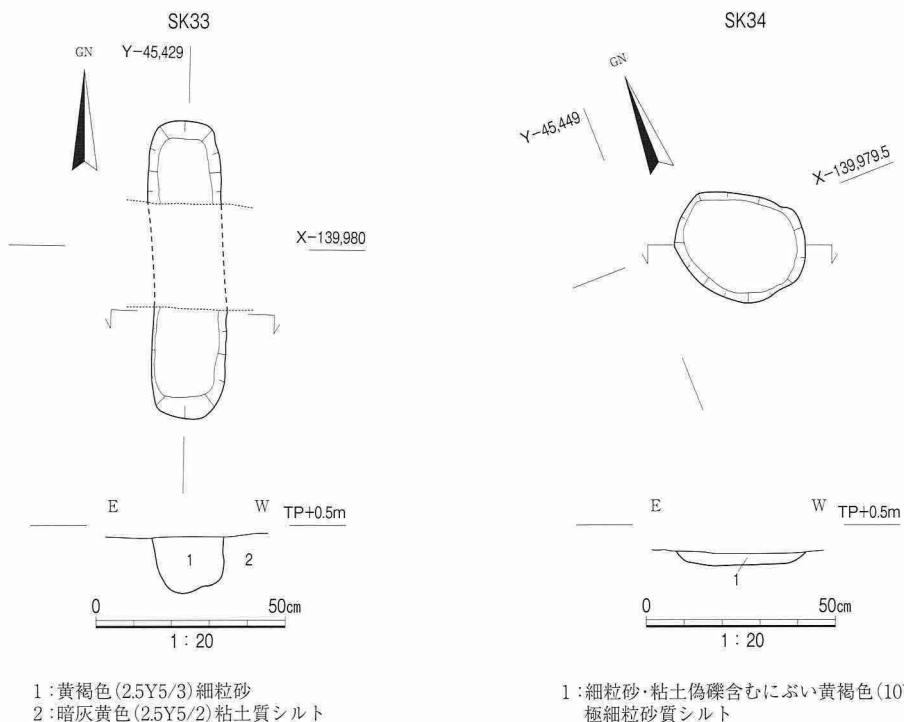


図23 第6層上面遺構平面・断面図

面形はやや不整の方形で深さは0.15mである(図23)。埋土は黄褐色細粒砂で、遺物は土師器の細片のみである。

SK34

調査区西南隅近くで検出した長径0.35m、短径0.28mの平面楕円形を呈する小土壙である。深さは0.04mを残すのみで、埋土は灰色細粒砂・粘土の偽礫を含む黄褐色極細粒砂質シルトである(図23)。遺物は出土しなかった。

iv) 第4層上面

中世後期の遺物を包含する第3層を除去した面で遺構検出を試みたが、顕著な遺構は確認されなかつた。

v) 各層・その他から出土した遺物

上記のほかに、各層から出土した遺物、および近世の遺構・地層に混入した当該期の遺物を報告す

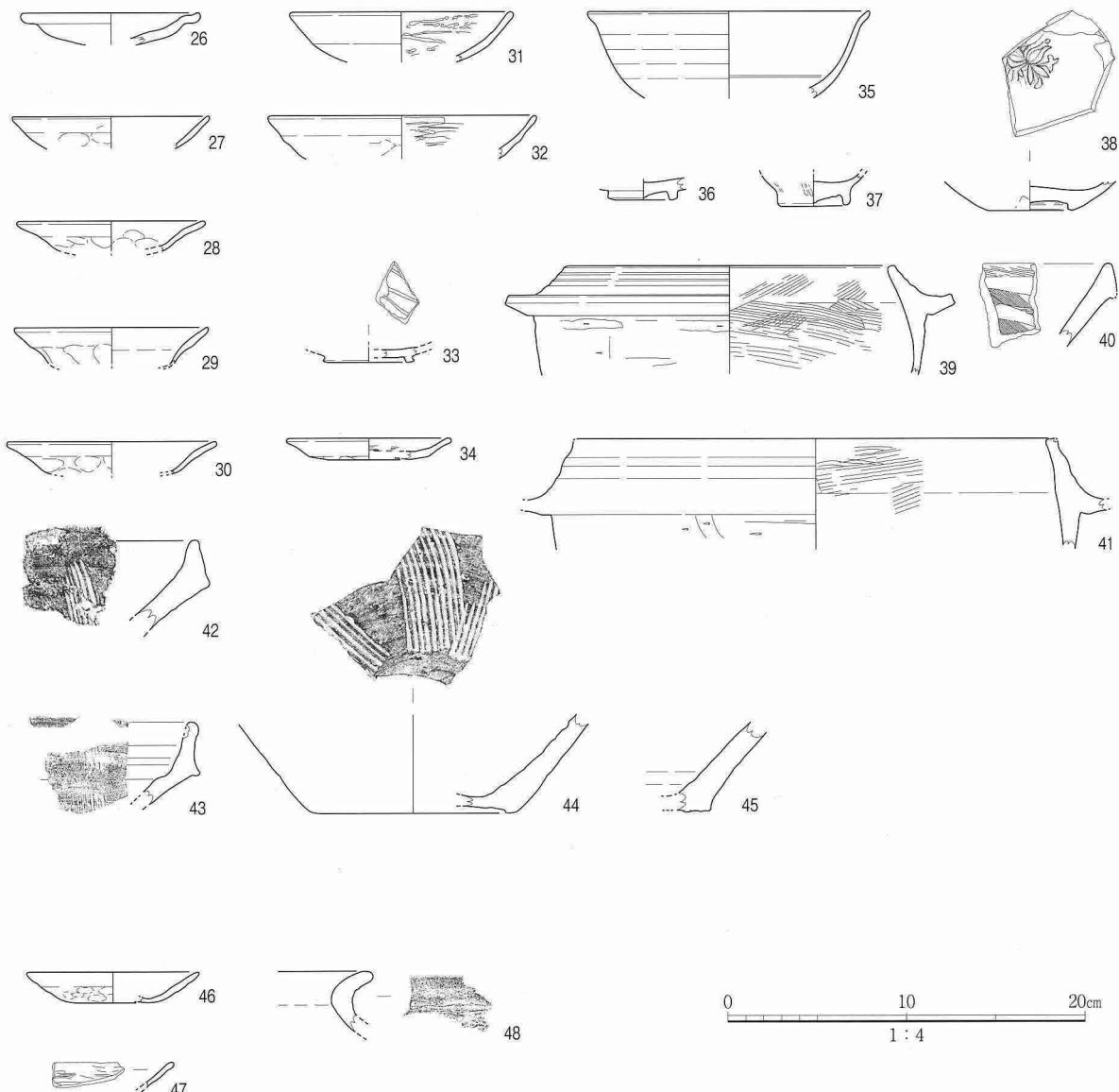


図24 SD31・SX32出土遺物実測図

SD31(26~45)、SX32(46~48)

第Ⅲ章 調査の結果

る(図25、図版14)。第7層からは瓦器碗49・50・Ⅲ51、中国産白磁碗52・53が出土した。瓦器碗49は内面のヘラミガキが密であり高台の形態が崩れていないことから12世紀後半頃のものである。一方、50は底部内面の暗文が疎らで高台も形骸化しているため13世紀後半頃のものであろう。中国産白磁碗52は口縁部が肥厚・外反せず、丸くおさめている。53は横田・森田分類の碗IV類[横田・森田1978]である。

第6層からは瓦器碗54・55・Ⅲ56、中国産白磁碗57、青磁碗58が出土した。瓦器碗54は内面のヘラミガキが比較的密であり、55も高台の形態が崩れていないことから12世紀後半頃のものである。中国産白磁碗57は横田・森田分類の碗V類[横田・森田1978]か。青磁碗58は体部下半の凸凹から蓮弁文碗の底部であろう。

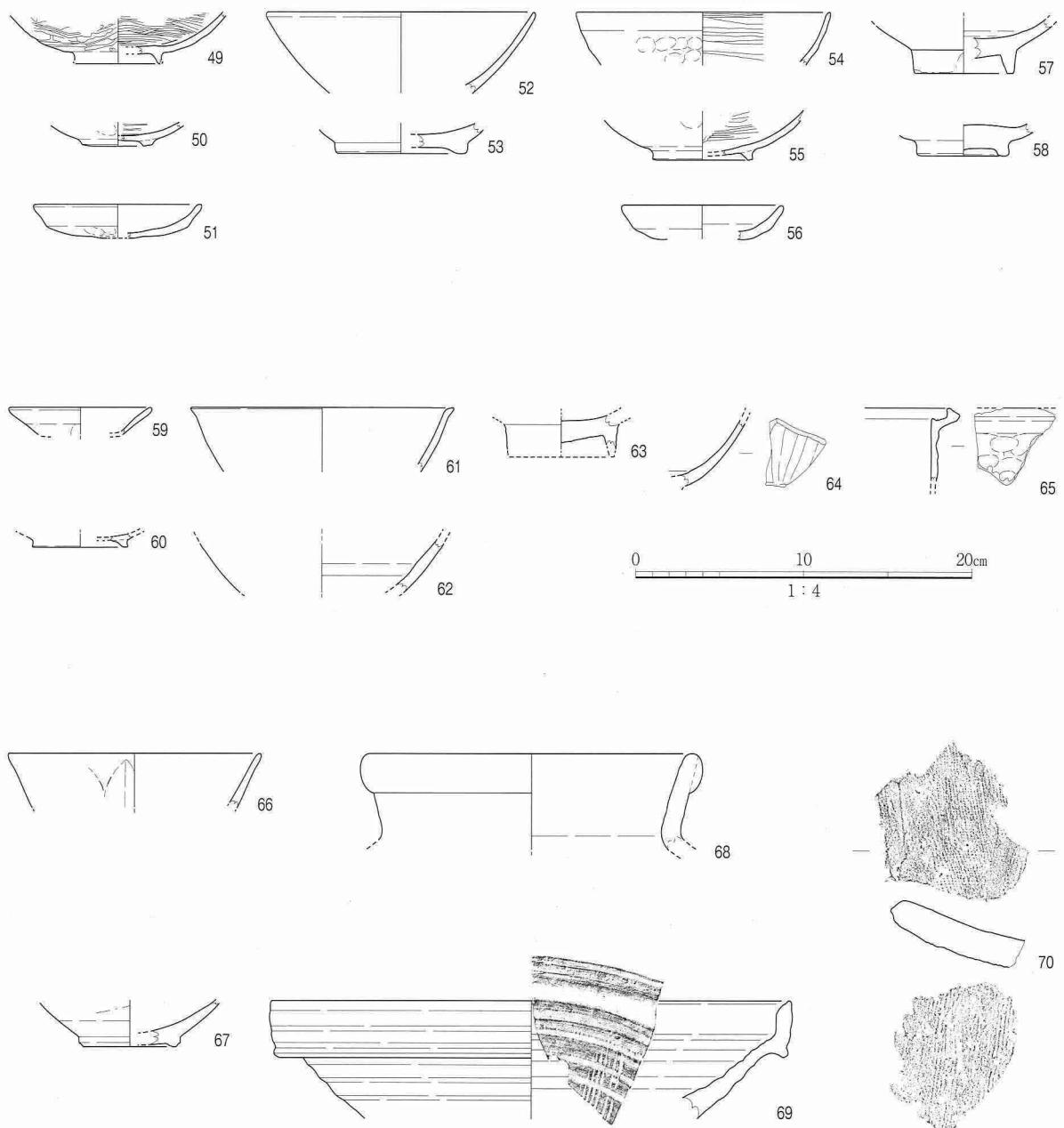


図25 各層・その他出土遺物実測図

第7層(49~53)、第6層(54~58)、第4層(59~65)、第2層(66)、SG11(67~70)

第4層からは土師器皿59、瓦器碗60、中国産白磁碗61～63、青磁碗64、瓦質土器鍋65が出土した。土師器皿59は口縁部・体部が斜め上方に開く形態である。瓦器碗60は底部の小破片のため、暗文などは確認できないが、高台の形態から13世紀前半頃のものと考えられる。中国産白磁碗61は横田・森田分類の碗Ⅷ類、63は碗V類[横田・森田1978]か。青磁碗64は鎬蓮弁文碗の体部片である。本層自体の年代を示すのは瓦質土器鍋65で、15世紀頃のものと考えられる。

第3層からは土器羽釜・擂鉢や土師器羽釜・皿、常滑焼甕の細片が出土したが、図化はできなかった。近世の第2層からは中国産青磁碗66が、またSG11からは中国産白磁皿67、備前焼甕68・擂鉢69、平瓦70が出土した。青磁碗66は鎬蓮弁文である。小破片のため口縁部径は不確かである。白磁皿67は横田・森田分類の碗IV類[横田・森田1978]に似た高台であるが、小振りであり器壁も上方へ向けて薄くなっていくことから、皿X I類[中世土器研究会編1995]の可能性がある。備前焼擂鉢69は口縁部上端に内傾する面をもち、16世紀後半のものであろう[佐藤1996]。平瓦70の凸面は縄目タタキ成形で、凹面には布目が残る。

3)江戸時代の遺構と遺物

i) 第3層上面および第2層下面

江戸時代の遺物を含む第2層を掘削した第3層上面で土壌SK12、第2層下面で多数の鋤溝を検出した。これらは第2層上面遺構と一括して写真撮影や実測を行ったので、同じ図に示している(図26、図版8)。

SK12

調査区東辺の第3層上面で検出した。最大幅1.7mの溝状を呈し、延長3.7mを確認したが、さらに東へ延びる。深さは0.35mあり、底面の起伏が著しい。埋土は黄褐色～オリーブ褐色の水成の砂で、流水のあったことがわかる。遺物はわずかな土師器・瓦器細片が出土したのみである。

鋤溝群

第2層下面で多数の細い溝を検出した。多くは幅0.15～0.40mほどで、幅広く見えるものも、いくつかが重なった結果であろう。いずれも浅く、検出長が短いのもかなりの削平を被っていること示す。耕作に伴って掘り込まれたいわゆる鋤溝とみられる。調査区西半部の南寄りは遺構面に金属の沈着が著しく、土地利用のあり方が南北で異なっていたとみられる。当該部分のみに鋤溝が見られるのは圃場としての利用範囲を示すものであろう。鋤溝はSE13・14付近を境に西では東西方向に、東では南北方向に走り、圃場区画が異なることがわかる。それぞれの溝の延長は短いが、その方向は北から西に5～10度程度振っているものが多い。

ii) 第2層上面

第1層(近現代作土)を除去した第2層上面で溜池SG11と2基の井戸SE13・14を検出した(図26、図版8～10)。

SG11

調査区西北隅において、下位層に見られるNR31が深さ80cmほどにまで埋まった後、滞留して溜池

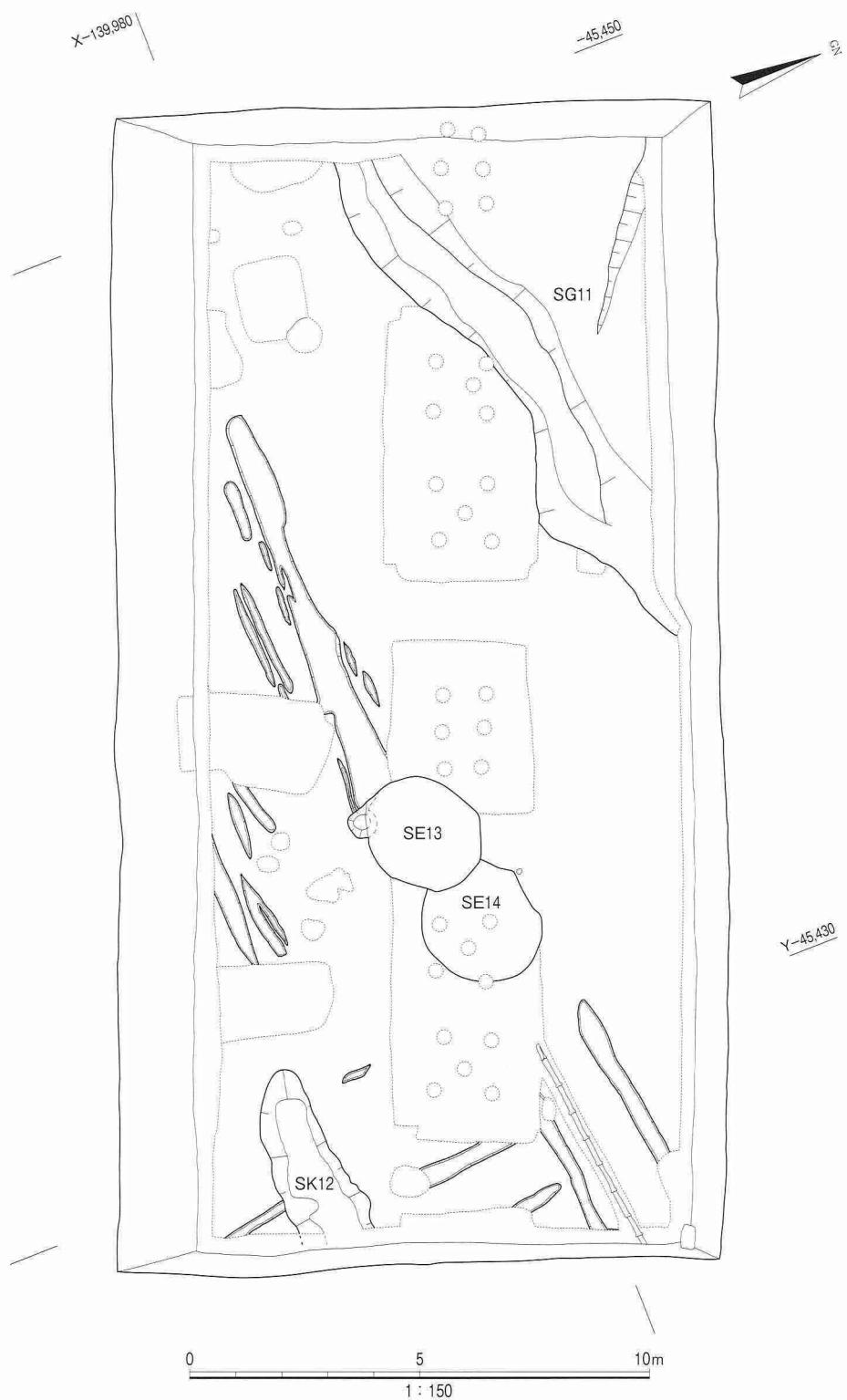


図26 第3層上面および第2層上面・下面遺構平面図

となったものである。旧市営住宅建設による攪乱もあり、南岸の西半部分では遺構の輪郭を明確にできなかった。図26に示した遺構のラインよりもやや内側になるものと思われる。近現代作土の畦の直下に当る西壁中央部付近の22・23・27層(図14)などは砂質の地層で、この溜池の堤に当る盛り土であろう。

岸からの埋め土と滯水に伴う泥質な地層が、斜めに互層をなすようすが北壁断面でよく観察できた。この泥の層と埋め土には陶磁器や瓦片、木片など多くの遺物が含まれており、溜池としての機能を失った後、ゴミ捨て場として徐々に埋め立てられていったことを示すが、最終的には流水によって埋没したものとみられる。

出土遺物として、瀬戸美濃焼碗72、肥前陶器皿73・74、肥前磁器染付碗75～79・81・染付鉢84・白磁紅皿85・染付瓶86、瀬戸美濃焼磁器染付碗80・82・輪花皿83、堺播鉢88を図示した(図29、図版15)。

瀬戸美濃焼碗72は内外面に鉄釉を掛け、内面に灰釉による文様を施す。肥前陶器皿73は底部内面に砂目が3箇所残り、高台の畳付にも砂が付着している。74の外面は体部と高台と境目が明瞭ではなく、碁笥底のように見える。肥前磁器染付碗75は外面に縦線で仕切った中に寿字を書く。76は外面に草花文を描き、底部内面は蛇の目釉剥ぎする。78の外面は二重網目文で、内面には淡く一重あるいは二重の網目を描く。81は外面に羊歯文などを描き、口縁部内面には雷文を巡らせる。染付鉢84は外面に粗い唐草を巡らせ、内面に花文を描く。白磁紅皿85の外面は型抜きによる蛸唐草文である。瀬戸美濃焼磁器染付碗80・82の外面は花文を描く。輪花皿83の内面は蛸唐草文である。

以上の陶磁器の年代の下限は、瀬戸美濃焼磁器が含まれることから19世紀中葉と考えられる。

SE14

調査区の中央やや東寄りで検出した(図27、図版9)。掘形内に旧住宅のコンクリート杭が4本も打ち込まれており、かなりの損傷を被っている。構造の概要は把握できたが、導水施設との接合に関する詳細については明らかにできなかった。なお、後述するSE13と同様に底面近くの激しい湧水のために重機を使用して縦板を引き抜き、計測・観察を行ったが、横板の一部については取り上げられなかった。したがって、図27は一部に推定復元部分を含んでいる。

検出面における掘形の直径は2.5～2.6mである。井戸側は上下2段からなる。

上段井戸側は井戸廃棄時に抜き取られているが、内部に落込んでいる井戸瓦から、瓦積みによって構成されたことがわかる。さらに、1点の破片のみであるが、本来の位置付近とおぼしき状況で検出され、下段井戸側の上端に組み合せて敷かれた板材がつくる円形の開口部の周縁に、円筒形に積み上げたものと推測される。

下段井戸側は内・外方の二重の木製枠からなる。外方の井戸側は、長方形の板材を横方向に積み上げ、四隅に立てた柱で保持している。隅柱は直径9.5～13.5cmの丸太の直交する2側面を平坦に削り、これを外方に向けて打ち込み、横板を留めている。形態は宇野隆夫氏分類の横板組隅柱どめ井戸のBV・b類[宇野1982]となるが、本例は各横板を全て鉄釘で隅柱に留めている。鉄釘は断面が一辺3.5～5.0mm程度の方形である。横方向に積み上げた板材は長さ65.5～80.2cmであるが、幅は6.0～24.7cmと

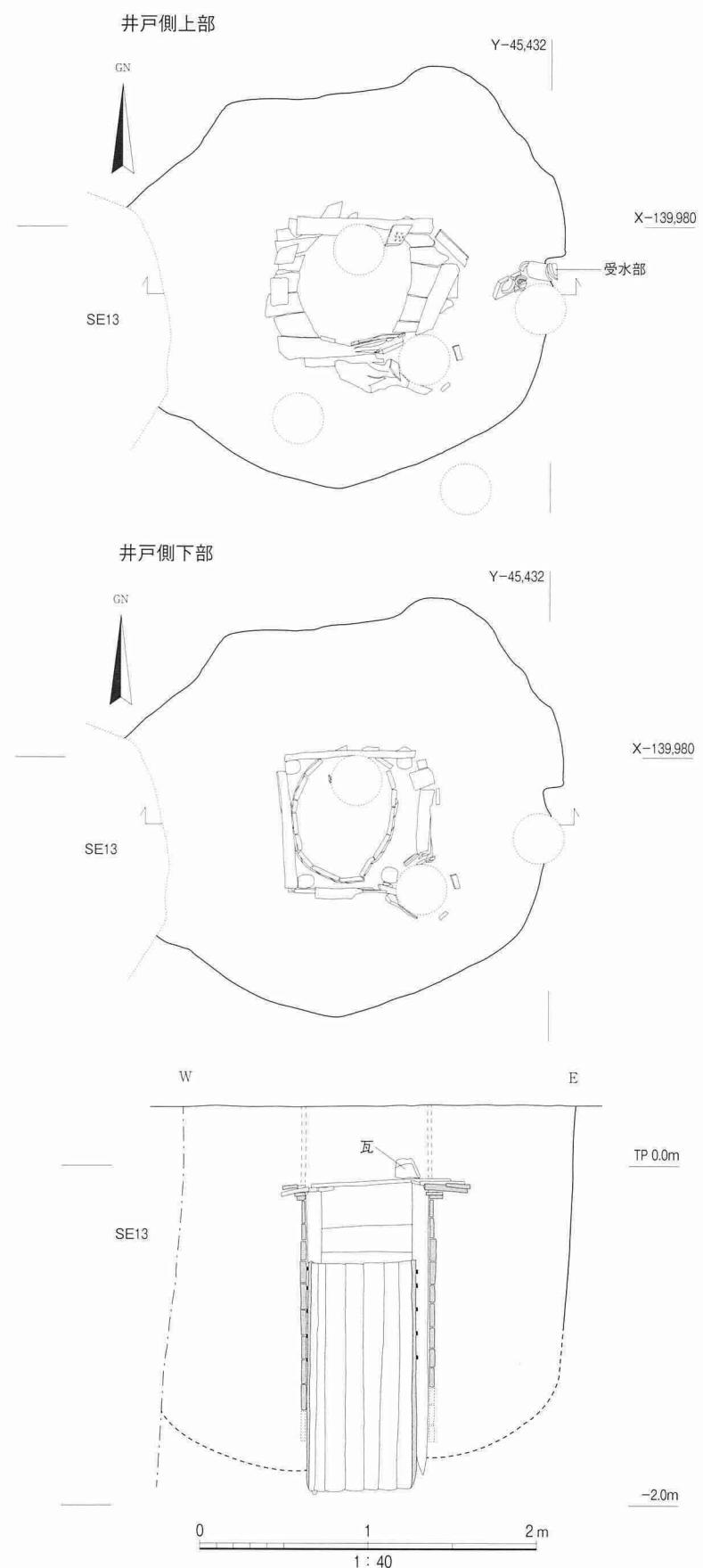
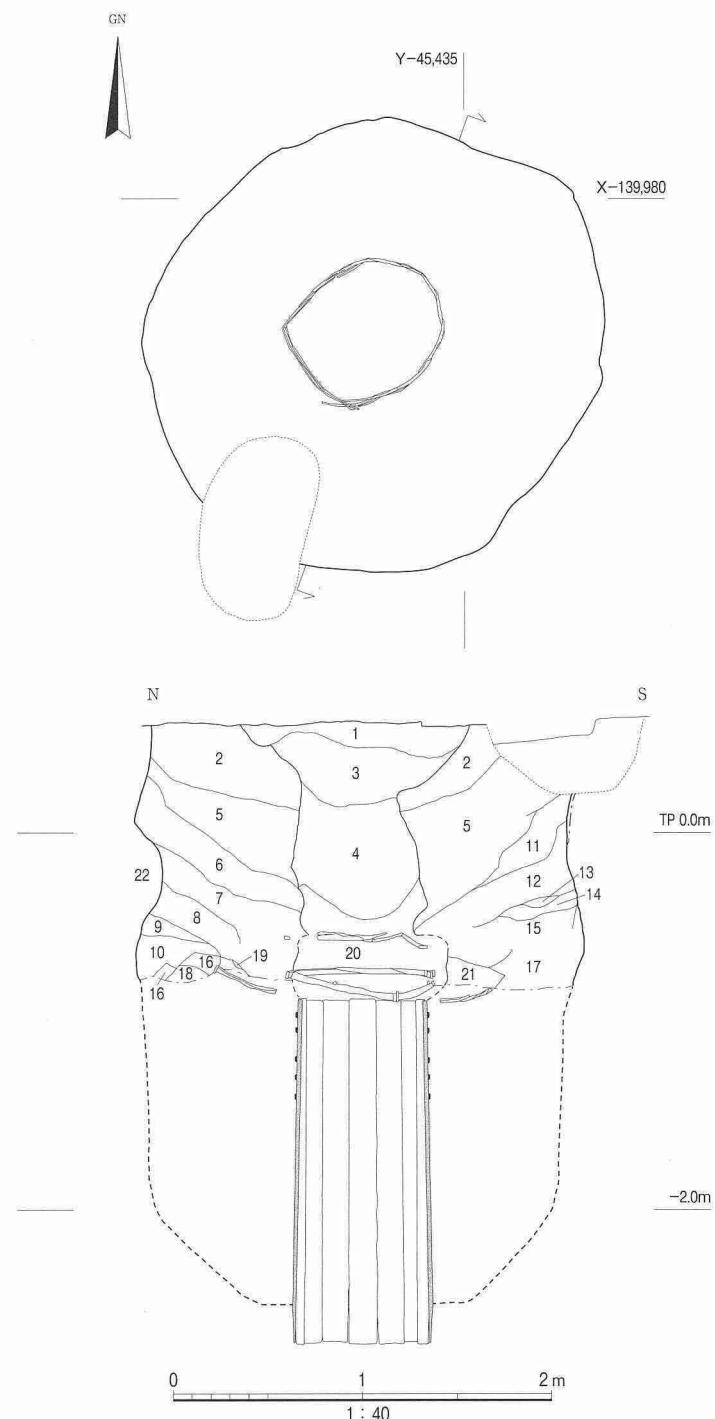


図27 SE14平面図・断面復元図



- | | |
|----------------------------|------------------------------------|
| 1 : 暗灰黄色(2.5Y5/2)泥砂 | 12: 黄灰色(2.5Y6/1)砂 |
| 2 : オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂泥 | 13: 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土 |
| 3 : 細粒砂含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)砂泥 | 14: オリーブ褐色(2.5Y4/3)泥 |
| 4 : 砂含む黄褐色泥 | 15: 暗灰黄色(2.5Y5/2)極細粒砂 |
| 5 : 暗灰黄色(2.5Y5/2)極細粒砂質泥 | 16: 灰色(7.5Y4/1)粘土 |
| 6 : にぶい黄色(2.5Y6/4)細粒砂質粘土 | 17: 灰色(5Y4/1)極細粒砂 |
| 7 : 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂 | 18: 灰色(5Y4/1)細粒砂 |
| 8 : 灰オリーブ色(5Y4/2)粘土 | 19: 灰色(7.5Y4/1)粘土 |
| 9 : オリーブ褐色(2.5Y4/3)極細粒砂 | 20: 泥土偽礫含む灰オリーブ色(5Y4/2)～灰色(5Y5/1)砂 |
| 10: 黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂 | 21: 灰オリーブ色(5Y4/2)極細粒砂 |
| 11: にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒砂 | 22: 暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒砂(粘土と薄い互層 第8層) |

図28 SE13平面・断面図

第Ⅲ章 調査の結果

かなりばらつきがある。4本の隅柱の長さは169~178cmで、その先端19~21cmを鋭く削り、杭状に加工して井戸底に打ち込んでいる。横板の最下段までは確認できなかったが、隅柱に見られる最下段の釘痕跡は、各柱の上端から131~140cmの位置にあり、井戸側の最下段の位置を推定できる。

外方井戸側の各辺の横板と隅柱頂部の上には、幅の狭い板を水平方向に2~3枚置く。さらにやや広い板材を並べて直径65cm程度の形の開口部をつくる。この板材は釘などによる固定は特になされていない。上述したようにこの周縁に沿って、井戸瓦が積み上げられていたようである。

内方井戸側は先端の外側をクサビ状に削った縦板を、井戸底に打ち込んで構築している。その縦板は16点からなり、長さは133.2~133.8cmと、よく揃っている。板の上下端幅の合計から復元される直径は、上端で62.4cm、下端で65.5cmと、裾広がりの断面形を呈する。縦板の保持には割竹製のタガを巡らしている。確認できたのは上端から約4、15、29、43、58cmの5条までである。

SE14には土管を並べた導水施設を伴う(図版10)。調査区東北隅近くの壁面から西へ延び、井戸の掘形に至る。土管の全長は約65.5cm、胴部の直径は11.0cm、ソケット部の直径は14.2cmで、9本分が検出されたが、基礎による攪乱によって2本が失われており、攪乱の底に掘形のみが検出された。ソケット部を東にしたその配列からは水が東から西へ流れたと考えられるものの、土管列のわずかな傾きからは水はその方向とは反対に流れることになる。この土管列が井戸の掘形に達した地点で、壁に沿うような形で下方に垂れ下がるように瓦などからなる施設が見られた。仮に受水部と呼ぶ。コンクリート杭による損壊が大きく、本来の形状がどこまで残っているか明らかではないが、現状では瓦当面を外した3点の軒丸瓦の筒部を組み合せて管状にし、その先を半裁した土管のソケット側で受けるように繋ぐよう見える。外した瓦当部のうち、2点は管状にした瓦に沿わせるように置かれていた。さらにその先には平面台形の板93が落ち込んでいる。広端幅13.5cm、狭端幅11.8cmで高さ18.9cmの板の上寄りに直径10.5cmの円孔が穿たれている。半裁された土管の先端は周縁を細かく打ち欠いており、この部分を嵌め込んで使用したものか。なお、この導水施設の方位は北で西に数度振っている。圃場区画の縁辺に設置されたものであれば、その区画の方位も同様であろう。

出土遺物としては、産地不明磁器鉢87、軒丸瓦89~91、軒平瓦92、木製部材93を図示した(図29・30、図版15)。

産地不明磁器鉢87は関西系窯場の製品の可能性がある。外面には唐草文を巡らせ、内面は白化粧のち細かい鱗状の文様を呉須で描く。井戸側内から出土した。89・90は右巻きの巴文軒丸瓦で、範傷が一致することから同范であることがわかる。91は瓦当部分を欠いている。89~91は導水施設につながる受水部から出土した。軒平瓦92の唐草文の中心飾は橋である。井戸側内から出土した。導水施設に使われた軒丸瓦の年代観から、この井戸は江戸時代後期以後につくられたものである。また、井戸側内上部から近代の磁器片が出土しており、埋め立てられたのはこの頃と考えられる。

SE13

調査区の中央やや東寄りで検出した(図28、図版10)。SE14との切合い関係があり、明らかに後出する。掘形は不整円形をなし、検出面での直径は2.4~2.7mと、SE14とほぼ同様の規模である。

SE14と同様に深く、底面近くでは激しい湧水によって壁面が崩壊するおそれがあり、重機を使用

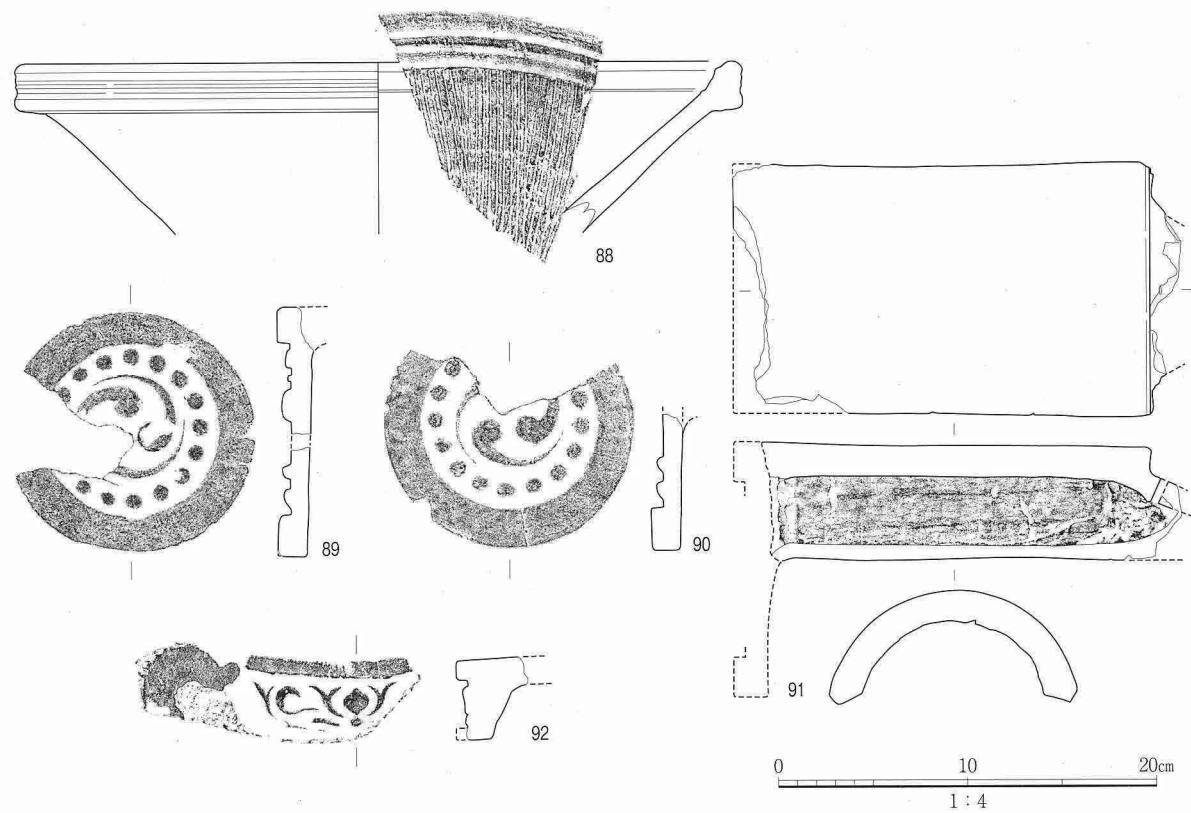
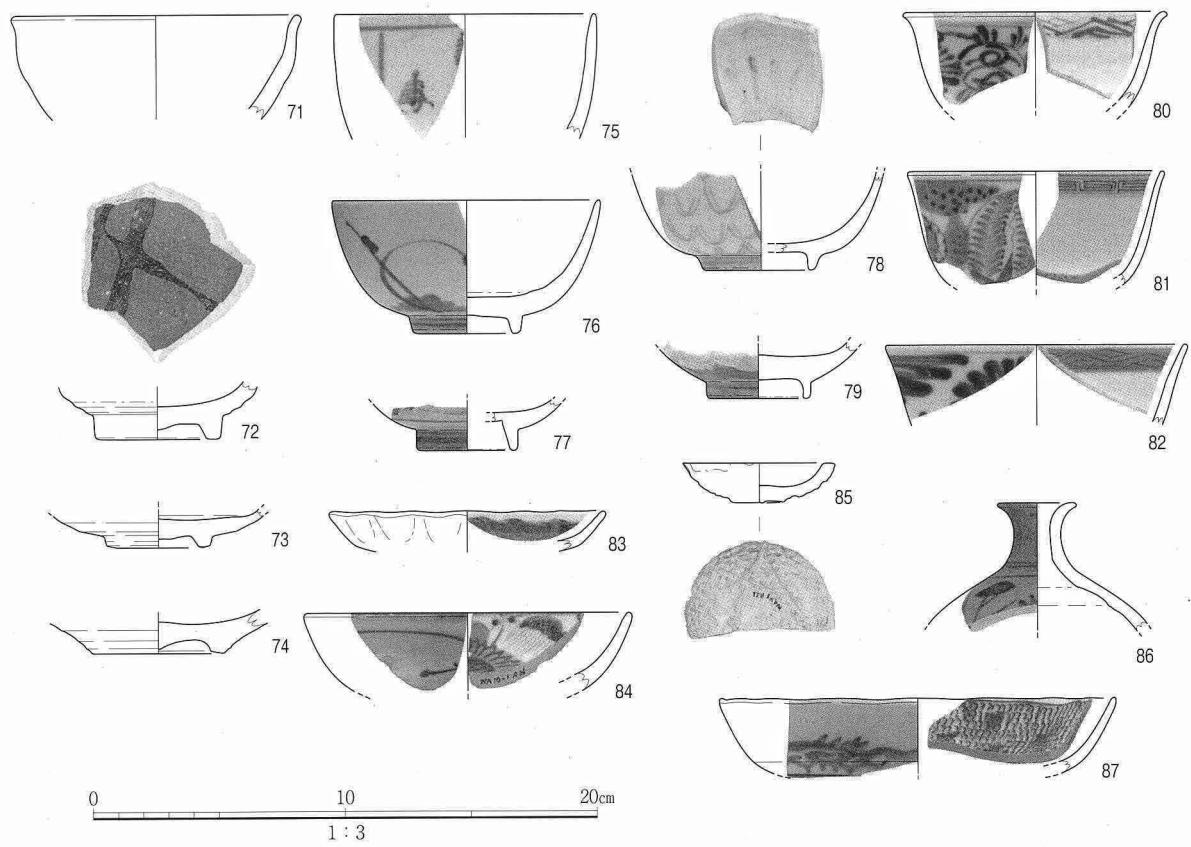


図29 SG11・SE14・その他出土遺物実測図
SG11(72~86・88)、SE14(87・89~92)、第2層(71)

第Ⅲ章 調査の結果

して縦板を引き抜き、計測・観察を行った。したがって、図28は一部に推定復元部分を含んでいる。

井戸側は2段以上が組まれていた。上段はすでに抜き取られていたが3条のタガが遺存しており、桶状の井戸側であったことがわかる。また、埋土の地層断面では裏込め土と井戸側内の堆積土との差異が明瞭に判別でき、上段の桶状井戸側の直径が下段とあまり変わらなかったことを示す。

下段はその上端が第2層上面から約1.5m下位で検出された。縦板を平面円形に並べて井戸側をつくるが、南側の一部で形状が崩れている。縦板は16点からなり、長さは181.1~181.8cmと、よく揃っている。各縦板の先端は長さ25~40cmにわたって外側がクサビ状に削られ、井戸底面に打ち込まれている。激しい湧水のために井戸底面は確認できなかつたが、先端の切削部分程度が土中に打ち込まれたものであれば、井戸の検出面からの深さは約3.1mとなる。縦板の幅はばらつきが大きく、必ずしも上端より下端の幅が大きいわけではないが、その合計の円周から復元すれば、直径は上端で67.8cm、下端で72.4cmと、明らかに裾広がりの断面形を呈する。

形態は宇野氏分類のBⅡ・a類(平面形が円形の縦板無支持井戸)に似るが、本例では縦板の外に割竹を縫り合せたタガを巡らせている。確認できたのは縦板上端からほぼ7、16、31、41、51cmとかなり接近した位置にある5条であるが、さらに下方にも巡っているようである。縦板の側縁は組み合せて円周となるように角度をもって削られており、打込みと併せて桶の技法で井戸側を補強している。

遺物は瀬戸美濃焼磁器や関西系陶器の細片が出土したのみで、図化できたものはないが、19世紀中頃以降、近代に降る遺構である可能性が高い。

第2層

上記のほかに、第2層から瀬戸美濃焼天目碗71が出土している。内外面に鉄釉を掛ける。豊臣期のものであろう。遺物は少なく、本来の地層の年代を示す陶磁器については図化できるものはなかった。

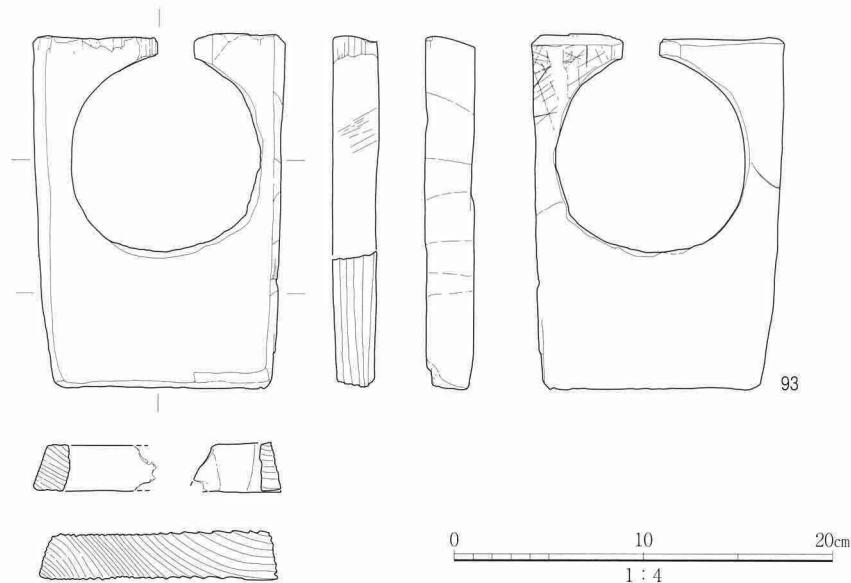


図30 SE14出土木製品実測図

第3節 西淡路1丁目所在遺跡出土の動物遺存体

丸山真史(奈良文化財研究所・客員研究員)

1)概要

報告する動物遺存体は、15世紀後半を下限とする自然流路NR31から出土したものであり、破片数にして15点を数える。種類と部位などを同定したものは12点で、そのうちウマが7点、ウシが6点である(表3)。また、大きさからウマとウシのいずれかと考えられるが、判別できなかったものが2点出土している。土中での腐食が進行しており、調査中、取り上げ後も形質を保持できなかったものがある。資料は全て調査中に肉眼で確認して採集したものであり、フルイを用いた土壤の水洗選別は行っていない。

表2 種名表

脊椎動物門	Vertebrata
哺乳綱	Mammalia
奇蹄目	Perissodactyla
ウマ科	Equidae
ウマ	<i>Equus caballus</i>
偶蹄目	Artiodactyla
ウシ科	Bovidae
ウシ	<i>Bos Taurus</i>

2)種類別の特徴

ウマ

遊離歯3点、下顎骨(左1右1)2点、橈骨(左1右1)2点、計7点が出土している。遊離歯は上顎第3後臼歯(左1右1)2点、部分を特定できない上顎臼歯(左右不明)1点である。第3後臼歯の歯冠高は左が42.9mm、右が56.0mmを測り、それぞれ生後8~9年、5~6年と推定される(註1)。下顎骨の全臼歯列長は左が166.7mm、右が169.0mmを測り、いずれも日本在来の御崎馬や木曽馬といった中型馬に相当する大きさである。また、左下顎骨の第1後臼歯は55.0mm、右下顎骨の第3後臼歯は59.8mmを測り、いずれも生後5~6年と推定される。



写真5 ④ウマの下顎骨(右、内側)

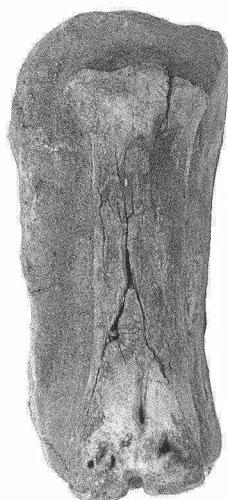


写真6 ⑧ウシの中手骨(左)

表3 動物遺存体一覧表

資料No.	枝番	遺構	小分類	部位	部分1	左右	計測(単位はmm)
①	1	NR31	ウマ	遊離歯	上顎M3	左	歯冠高：42.9
①	2	NR31	ウマ	遊離歯	上顎M3	右	歯冠高：56.0
①	3	NR31	ウマ	遊離歯	上顎臼歯	-	
②		NR31	ウシ	上腕骨	近位部－遠位端	左	
③		NR31	ウマ	下顎骨	下顎体	左	全臼歯列長：166.7, 前臼歯列長：88.8, 後臼歯列長：77.1, 歯冠高M3：59.76
④		NR31	ウマ	下顎骨	下顎体	右	全臼歯列長：169.0, 前臼歯列長：88.0, 後臼歯列長：82.7, 歯冠高M1：5.0, M3：56.1
⑤		NR31	ウマ	橈骨	骨幹部	左	
⑥		NR31	ウシ	肩甲骨	近位部－遠位部	右	肩甲頸最小幅：61.4
⑦		NR31	ウマ	橈骨	近位部－骨幹部	右	
⑧		NR31	ウシ	中手骨	ほぼ完形	左	近位端最大幅：61.5, 骨幹部最小幅：36.8
⑨		NR31	ウシ	中足骨	ほぼ完形	左	最大長：246.9, 骨幹部最小幅：37.3
⑩		NR31南肩斜面	ウシ	上腕骨	近位部－遠位端	右	
⑪	1	NR31南肩斜面	ウシ	脛骨	ほぼ完形	左	最大長：336.2以上
⑪	2	NR31南肩斜面	ウシ？	寛骨？	腸骨？	右？	
⑪	3	NR31南肩斜面	ウシ/ウマ	四肢骨	骨幹部	-	

ウシ

上腕骨(左1右1)2点、肩甲骨(右)、中手骨(左)、脛骨(左)、中足骨(左)が1点ずつ、計6点が出士している。肩甲骨の肩甲頸最小幅が61.4mm、中手骨の近位端最大幅が61.5mm、中足骨の最大長が246.9mmを測る。中手骨と中足骨の計測値では、体高120~125cm、135~140cmと推定され、日本在来の口之島牛や見島牛に相当する大きさと、それより大きな黒毛和種に相当する大きさである。

ウマ／ウシ

四肢骨が2点出土しており、そのうち1点はウシの肩甲骨に似るが、同定には至らない。

3)当遺跡の牛馬利用

今回の調査ではウシとウマが出土しており、それらの出土量はほぼ同数である。いずれの骨も腐食が進んで脆弱な状態にあり、同定したもの以外に、土中で朽ち果てたものがあったと推測される。

ウシは日本在来の口之島牛や見島牛と同等、それより大きな個体の両方が含まれる。四肢骨は骨端がすべて癒合しており、いずれも成獣と考えられる。ウマは日本在来の御崎馬や木曾馬といった中型馬に相当する大きさで、年齢も生後5~6年、8~9年と若齢から壮齢の働き盛りの個体が含まれている。ウシ、ウマとも成獣ばかり、体格の良い個体が含まれる。

ウシ、ウマは農耕、荷物の運搬、人を乗せるなどに使役され、時には祭祀・儀礼の犠牲となり、死後はそれらの皮、肉、骨、角、蹄などが資源として利用される。ウシ、ウマはいずれも散乱状態で、骨格の正位置を保持して出土したものがないことから、いずれも溝に投棄する前に解体されていたと考えられる。NR31は調査区北西隅に位置しており、部分的な調査に留まるが、南岸が湾入する部分に集中して骨が出土する。しかし、骨が密集して層をなすような出土状況ではないことから、その付

近で一時に投棄したものと考えられる。

大阪府東遺跡、兵庫県若宮遺跡などの近畿地方の中世遺跡ではウシやウマが多く出土しており、これらも解体した後に土壌や溝に投棄されたと考えられている[松井2004]。一方、神奈川県長谷小路周辺遺跡、三重県志知・南浦遺跡など東日本の遺跡では、ウシやウマの橈骨などからU字形の素材を切り出している痕跡が見られる[宗臺・宗臺1994、丸山・松井2008]。近畿地方ではウシ、ウマの骨の加工は、16世紀後半の住友銅吹所跡などで見られる[久保1998]。当遺跡で骨を加工した痕跡は見られず、利用することはなかったのであろう。また、大阪府池島・福万寺遺跡、岡山県鹿田遺跡などでは、祭祀・儀礼に伴うウシの頭蓋骨や下顎骨を土壌や井戸に埋納している[松井2001]。NR31では祭祀に関連する遺物は出土しておらず、溝の中にも特別な遺構は見られないことから、祭祀にともなう犠牲とは考えられない。

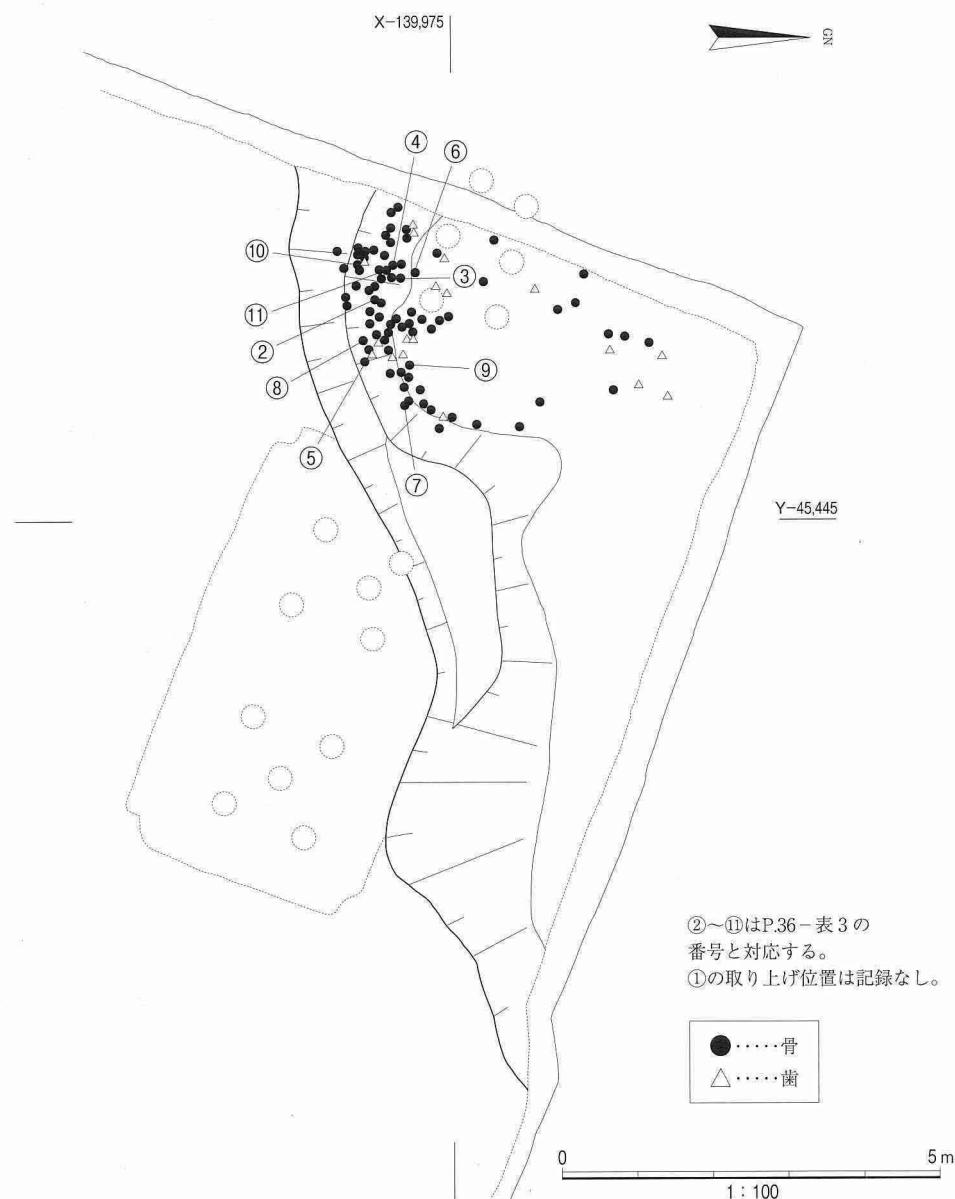


図31 動物遺存体出土状況図

第Ⅲ章 調査の結果

今回の調査で出土したウシ、ウマは出土量が少なく、中世後半における当地周辺の牛馬利用の実相を明らかにするには至らないが、当遺跡一帯が中世後期には農耕地であったこと、骨に加工痕はなく、祭祀に伴う痕跡も見られないことから、農耕や荷物の運搬などに使役された後に、皮や肉をとって、骨だけを溝に投棄したと推測される。

4)まとめ

NR31ではウシとウマが出土しており、いずれも成獣で体格の良いものが含まれている。出土状況や中世後期には周辺が農耕地であったことなどを考えれば、牛馬を農耕や荷物運搬に使役し、死後はその皮や肉を利用していたと考えられる。今回の動物遺存体の出土量はそれほど多くなく、今後、周辺の調査が進展し、資料を蓄積した後に再検討することで、中世後期の農村部における牛馬利用を明らかにする必要がある。

註)

(1)[西中川編1991]に基づく。以下の死亡年齢、体高などの推定も同様である。

第IV章 調査成果のまとめ

1. 本調査区で最も古い遺構はSK52で、出土した黒色土器などから、遅くとも平安時代中期には陸化し、安定した人々の営みが開始されていることが知られる。それ以前の遺物としては弥生時代終末期とみられる製塩土器や古代の須恵器なども見られ、いずれも流水に伴ってもたらされたものであろうが、付近に当該期の集落が存在したことがうかがえる。

2. 最下位の作土層である第7層が形成されるのは、その下位で検出されたNR51や第7層自体に含まれている遺物からみて14世紀中頃～後半以降であるが、その後も近現代作土の第1層に至るまで何層もの作土層が見られる。この地がいくたびにもわたる淀川水系の洪水を被りながらも、基本的には耕作地としての利用が続けられたこと示す。第7層上面の2条の溝SD41・42をはじめとして、第2層下面の鋤溝群、第2層上面の井戸に伴う導水施設、さらには近現代作土(第1層)の畦畔方向にいたるまで、その方向はよく似ている。それぞれの検出距離が短いため正確ではないものの、ほぼN5°～10°Wの範囲に収まりそうである。自然流路であるNR51も岸の浸食はありながらも、大きく見ればこの方向性に規定されている可能性がある。本調査地の西方、現在の淀川区宮原、三国、木川付近の広い範囲には条里地割の存在が指摘されている[新修大阪市史編纂委員会1988]。この方位がN約8°Wを示しており、本調査地の遺構とほぼ一致していることは興味深い。この地が中世における開発当初から条里地割に則った形で耕地の形成がなされ、それが踏襲された可能性がある。ただし、東隣のWA08-1次調査の水田畦畔や鋤溝の方針とはやや異なっているため、周辺における調査成果の増加を待つてあらためて検討する必要がある。

3. 調査区西北で第8層上面に見られる自然流路NR51はその後も踏襲され、やがて江戸時代には溜池となり、幕末には埋められる。その過程で、15世紀後半を下限とするNR31では南岸から多量の動物遺存体が投棄されている。皮革や肉の利用などに伴う残滓の投棄であろう。ただし、下位層のNR51や最下位層の作土である第7層からも動物遺存体は出土しており、この地において大型獣の解体が始まられる時期がさらに遡る可能性を示している。

4. 第2層上面からは2基の井戸が検出された。そのうちSE14は特異な構造をもつ。井戸自体も下段の井戸側が外方の方形木製枠、内方の桶状側と二重に構成された特徴的なものであるが、さらに導水施設を伴う。井戸との接合部の構造がよくわからないこと、土管の配列からは井戸へ水を引いたと考えられるものの、わずかであるが井戸の方が導水施設の東の先より高いこと、および、この井戸には現在でも豊富な湧水があり、他所からの導水が必要とは思われないことなど、その機能については不明な点が多い。

引 用・参 考 文 献

- 池田研1999、「古墳時代の貝出土遺跡－崇禪寺遺跡を中心に－」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要』第2号、pp.373–379
- 石井啓2006、「備前」：瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター編『江戸時代のやきもの－生産と流通－』（記念講演会・シンポジウム資料集）、pp.175–198
- 市原 実1993、『大阪層群』 創元社
- 宇野隆夫1982、「井戸考」：『史林』第65巻第5号 史学研究会、pp.1–39（『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』真陽社 1989年に所収）
- 大阪市文化財協会1996、『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』I
1999、『崇禪寺遺跡発掘調査報告』I
2001、「崇禪寺遺跡の調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1998年度－』、pp.103–111
2002、「TJ00–2次調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1999・2000年度－』 pp.181–190
2010、『西淡路1丁目所在遺跡発掘調査報告』
- 大阪文化財研究所2010、『宮原遺跡発掘調査報告』
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会
1991、「中田邸建替えに伴う崇禪寺遺跡発掘調査(SZ89–13)略報」：『平成元年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.121–126
1996、「新大阪森ビル建設に伴う発掘調査(MH94–2)」：『平成6年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.153–165
2001、「丸紅株式会社による建設工事に伴う宮原遺跡B地点発掘調査(MH99–3)」：『平成11年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.3–5
2003a、「崇禪寺遺跡発掘調査(SZ01–4)報告書」：『平成13年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.61–65
2004、「崇禪寺遺跡発掘調査(SZ02–1)報告書」：『平成14年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.51–53
2008a、「宮原遺跡発掘調査(MH06–1)報告書」：『平成18年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.73–76
2008b、「宮原遺跡における発掘調査(MH06–2)報告書」：『平成20年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.297–303
2008c、「西淡路1丁目所在遺跡発掘調査(WA06–1)報告書」：『平成20年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.307–313
2009、「西淡路1丁目所在遺跡B地点発掘調査(WA07–1)報告書」：『平成21年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.305–316
- 大阪府教育委員会1982、「崇禪寺遺跡発掘調査概要」I
2003、「崇禪寺遺跡」（大阪府埋蔵文化財調査報告2002–4）
- 梶山彦太郎・市原実1986、『大阪平野のおいたち』 青木書店

- 京都市埋蔵文化財研究所2003、『平安京左京四条二坊十四町』
- 久保和士1998、「住友銅吹所出土の動物遺体」：『住友銅吹所跡発掘調査報告』 大阪市文化財協会、pp.339-377
- 久保和士・松井章2001、「さまざまな生産－角・骨・皮に関する生産－」：『図解・日本の中世遺跡』編集代表 小野正敏 東京大学出版会、pp.122-125
- 建設省国土地理院1983、『土地条件調査報告書(大阪平野)』
- 小山正忠・竹原秀雄1970、『新版 標準土色帖』 日本色研事業株式会社
- 櫻井久之1999、「崇禪寺遺跡の性格に関する予察」：『崇禪寺遺跡発掘調査報告』I 大阪市文化財協会、pp.29-32
- 佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」：『長原遺跡発掘調査報告』V 大阪市文化財協会、pp.102-114
- 1996、「中世後期の陶磁器・土器について」：『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』I 大阪市文化財協会、pp.81-92
- 宗臺秀明・宗臺富貴子1994、『長谷小路周辺遺跡 由比ヶ浜三丁目二二八・二二九番外(No.二三六)』 長谷小路周辺遺跡発掘調査団
- 新修大阪市史編纂委員会1988『新修大阪市史』第1巻 大阪市
- 杉本厚典1999a、「崇禪寺遺跡の古墳時代初頭の土器様式」：『大阪市文化財協会研究紀要』第2号 大阪市文化財協会、pp.365-372
- 1999b、「崇禪寺遺跡の出土土器の特徴と編年」：『崇禪寺遺跡発掘調査報告』I 大阪市文化財協会、pp.17-28
- 積山 洋1994、「上町台地の北と南－難波地域における古墳時代の集落変遷－」：『大阪市文化財論集』 大阪市文化財協会、pp.173-191
- 中世土器研究会編1995、『概説 中世の土器・陶磁器』
- 趙哲済2005、「河内平野の古地理変遷」：『平野区誌』平野区誌刊行委員会、p.24
- 西中川駿編1991、「古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究」 平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告
- 西成郡役所1962、『西成郡史』 名著出版
- 服部昌之1988、「古代における景観構成とその変化」：新修大阪市史編纂委員会編『新修大阪市史』第1巻 大阪市、pp.43-89
- 文化庁文化財部記念物課2010、「第1節 遺跡における土層の認識」：『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』、pp.94-115
- 平凡社地方資料センター編1986、『大阪府の地名』1(日本歴史地名大系28巻) 平凡社
- 松井章2001、「動物祭祀」：『図解・日本の中世遺跡』編集代表 小野正敏 東京大学出版会、pp.192-193
- 松井章2004、「近世初頭における斎牛馬処理システムの変容」：『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会50周年記念論集 考古学研究会、pp.407-416
- 丸山真史・松井章2008、「志知南浦遺跡から出土した動物遺存体」：『志知南浦遺跡』 三重県埋蔵文化財センター、pp.229-240
- 森島康雄1992、「畿内産瓦器碗の併行関係と年代」：『大和の中世土器』II 大和古中近研究会、pp.113-117
- 森田勉1982、「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」：『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会 pp.47-70
- 横田賢次郎・森田勉1978、「大宰府出土の輸入陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」：『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館 pp.1-26

**The Excavation Report
of the
Nishiawaji 1-chome Site
in Osaka, Japan**

Volume II

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
The Municipal Apartmenthouse complex
in fiscal 2010

March 2012

Osaka City Museum Organization
Osaka City Cultural Properties Association

CONTENTS

Foreword

Explanatory notes

Acknowledgement

Chapter I Geographical and Historical Background 1

S.1 Geographical Background

S.2 Progress of research and report making

Chapter II Background and Progress of Research and Report making 9

S.1 Background of research

S.2 Progress of research and report making

Chapter III Investigation Results 11

S.1 Stratigraphy

S.2 Features and Artifacts

1) Artifacts of pre-Nara period

2) Features and artifacts of the Heian to Muromachi period

3) Features and artifacts of the Edo period

S.3 Faunal remains from the Nishiawaji 1-chome site

1) Outline

2) Character of each species

3) Utilization of cattle and horse in this site

4) Conclusion

Chapter IV Conclusion 39

References and Bibliography 40

Postscript and Index

English Contents

報 告 書 抄 錄

原 色 図 版



中世の輸入磁器

図 版

図版一 第8層上面遺構（一）



第8層上面遺構(北西から)



NR51(南東から)

図版二 第8層上面遺構 (一一)



NR51断面(西から)

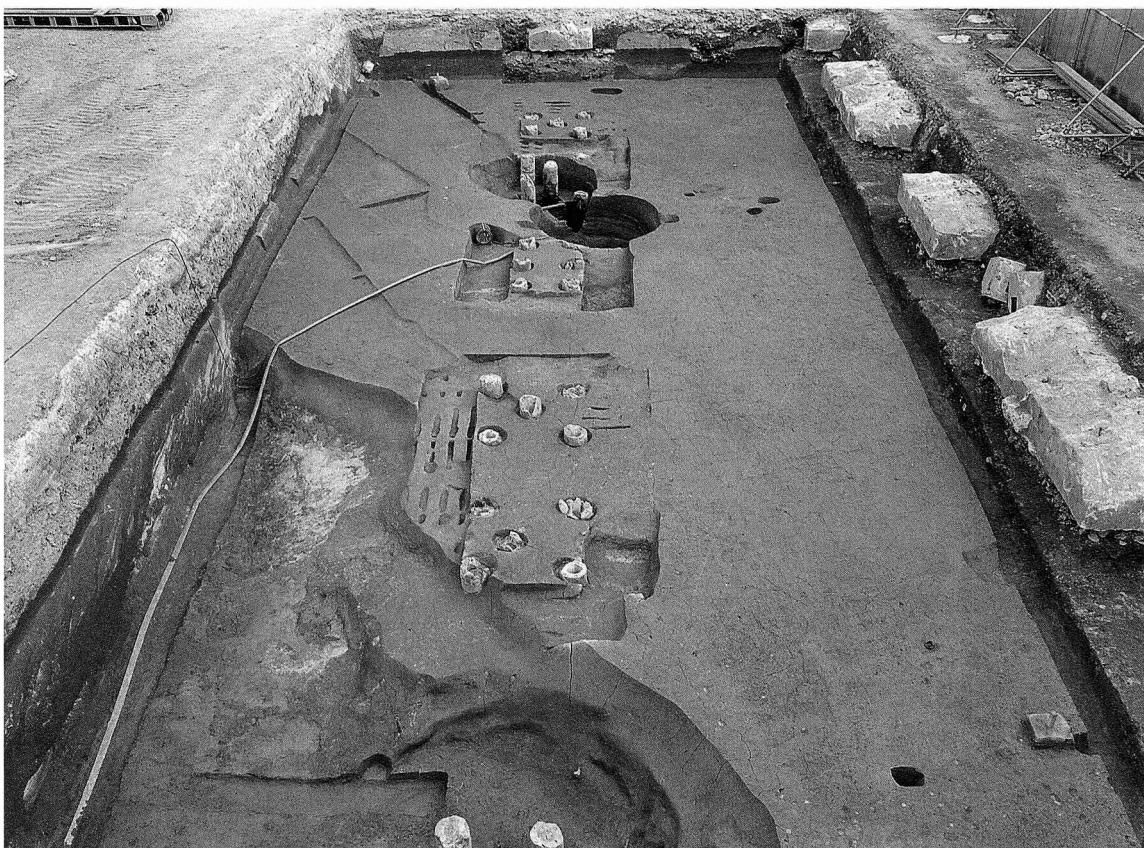


SK52(北西から)



SK52遺物出土状況

図版三 第7層上面遺構



第7層上面遺構(北西から)



SD41・42(西から)

図版四 第6層上面遺構（二）



第6層上面遺構(北西から)



SX32(東から)

図版五 第6層上面遺構(一)



NR31動物遺存体出土状況(北東から)



NR31動物遺存体出土状況(南西から)

図版六 第6層上面遺構(三)



NR31動物遺存体④
出土状況



NR31動物遺存体⑤
出土状況



NR31動物遺存体⑥
出土状況

図版七 第6層上面遺構（四）

NR31動物遺存体⑨
出土状況



NR31動物遺存体⑩
出土状況



NR31動物遺存体⑪
出土状況



図版八 第3層上面および第2層下面・上面遺構



第3層上面および第2層下面・上面遺構(北西から)



SG11(南から)

図版九 第2層上面遺構(一)

SE14(南から)



SE14井戸側検出状況
(南から)



SE14井戸側検出状況
(南西から)



図版一〇 第2層上面遺構(二)



SE14に伴う導水施設
(東から)

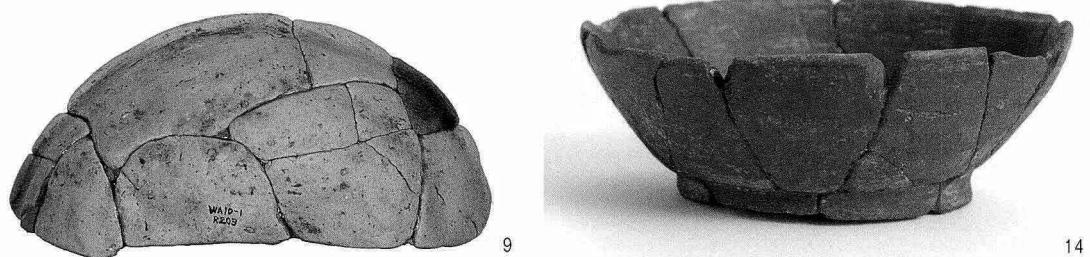
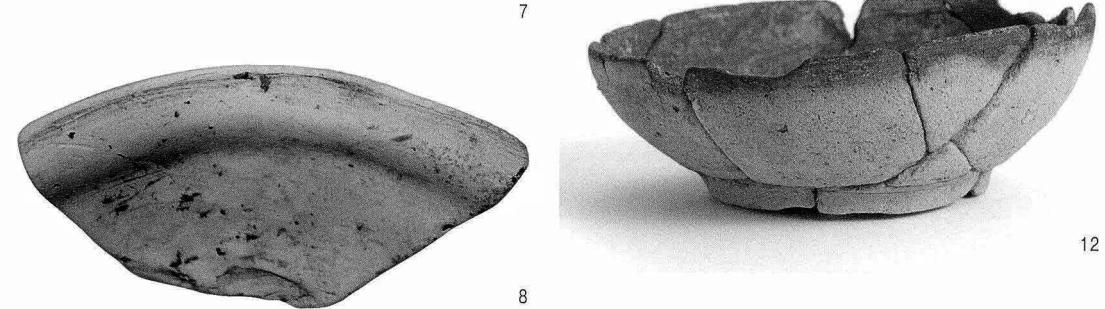
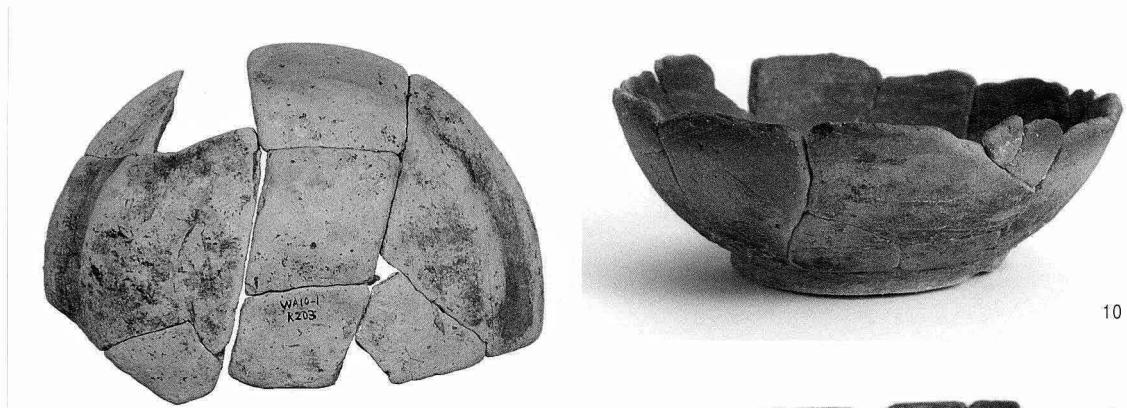


SE14受水部



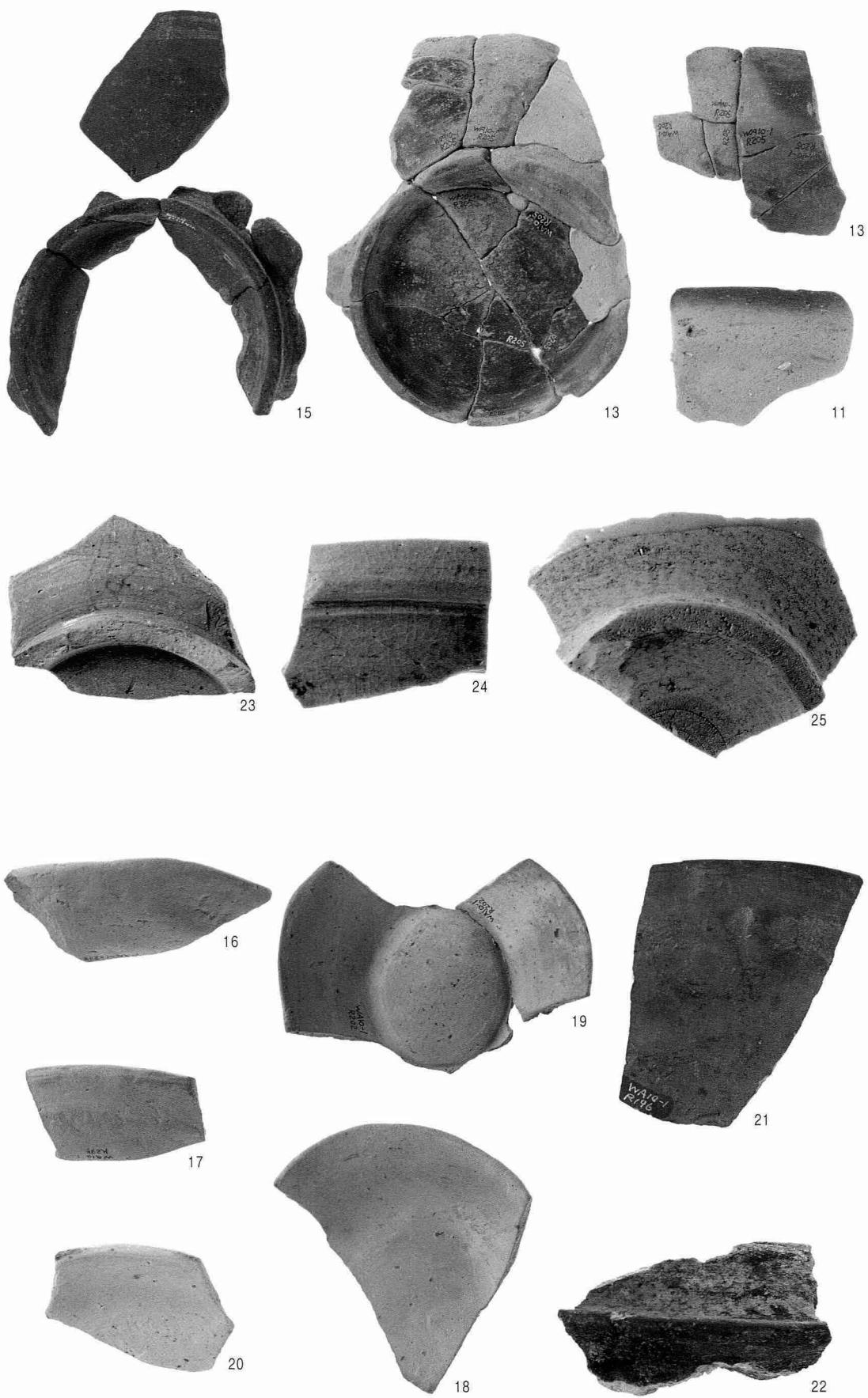
SE13(南から)

図版一 奈良時代以前の遺物・SK52出土遺物



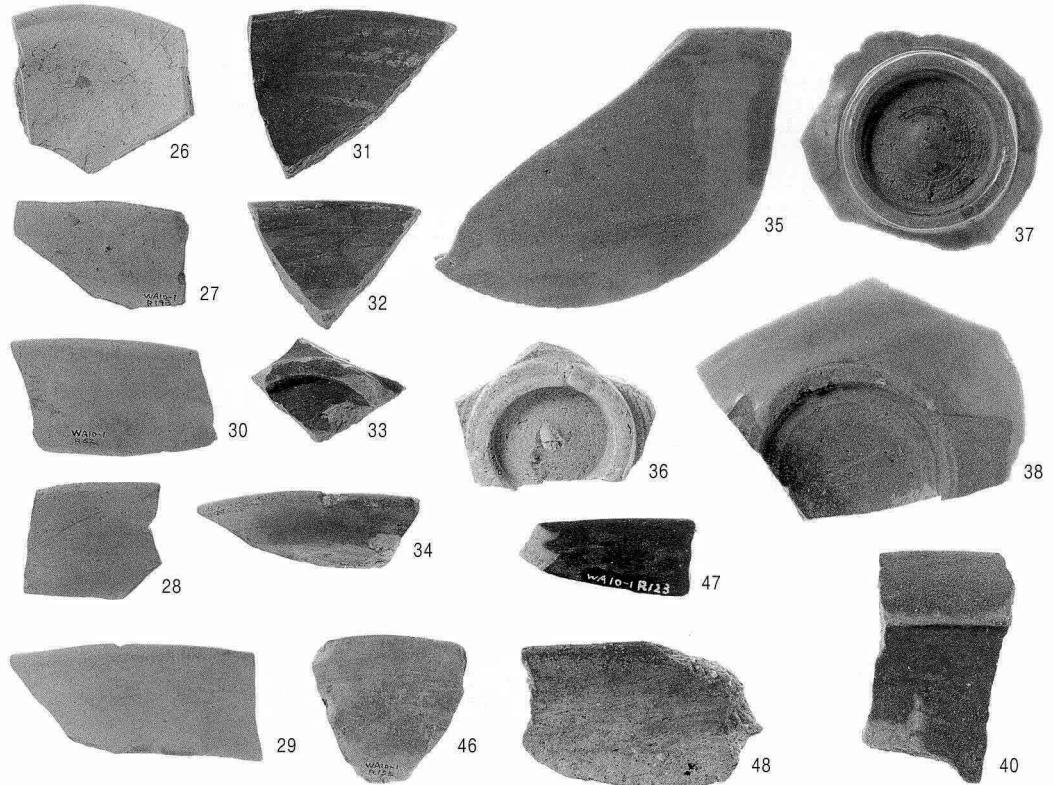
NR51(1)、NR31(2・4・6)、第4層(3・5)、SK52(7~10・12・14)

図版二
SK52・NR51 灰土遺物

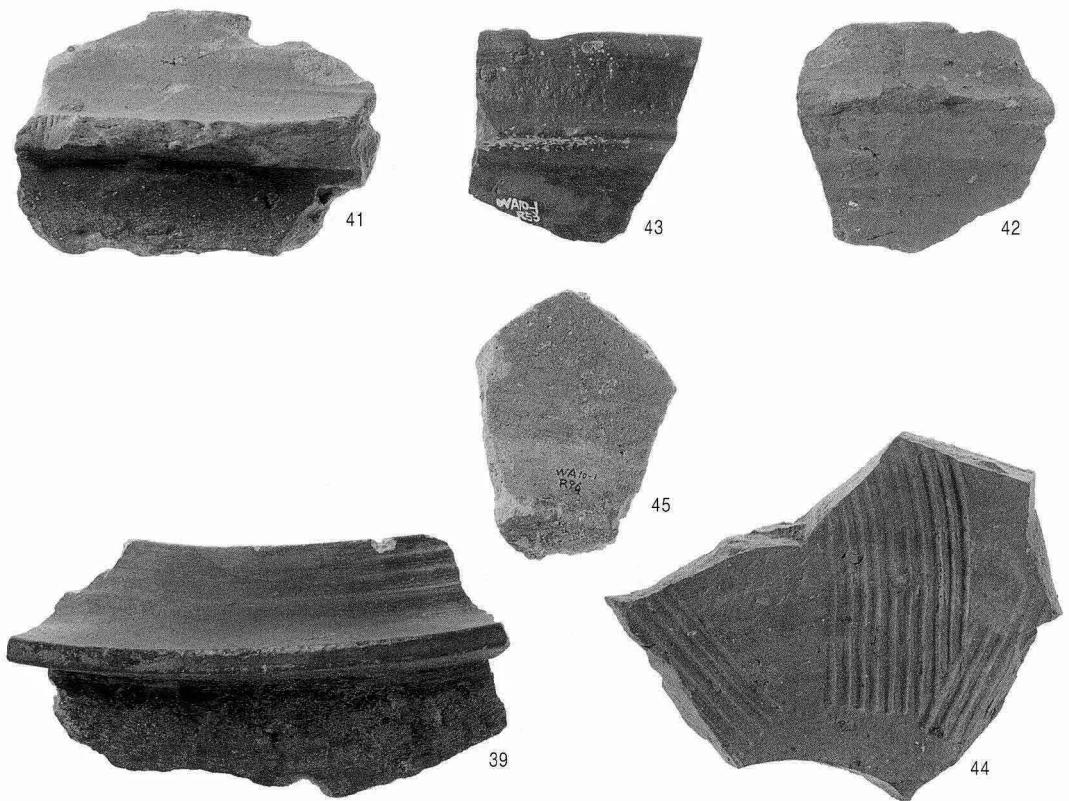


SK52(11・13・15)、NR51(16~25)

図版一三 NR31・SX32出土遺物

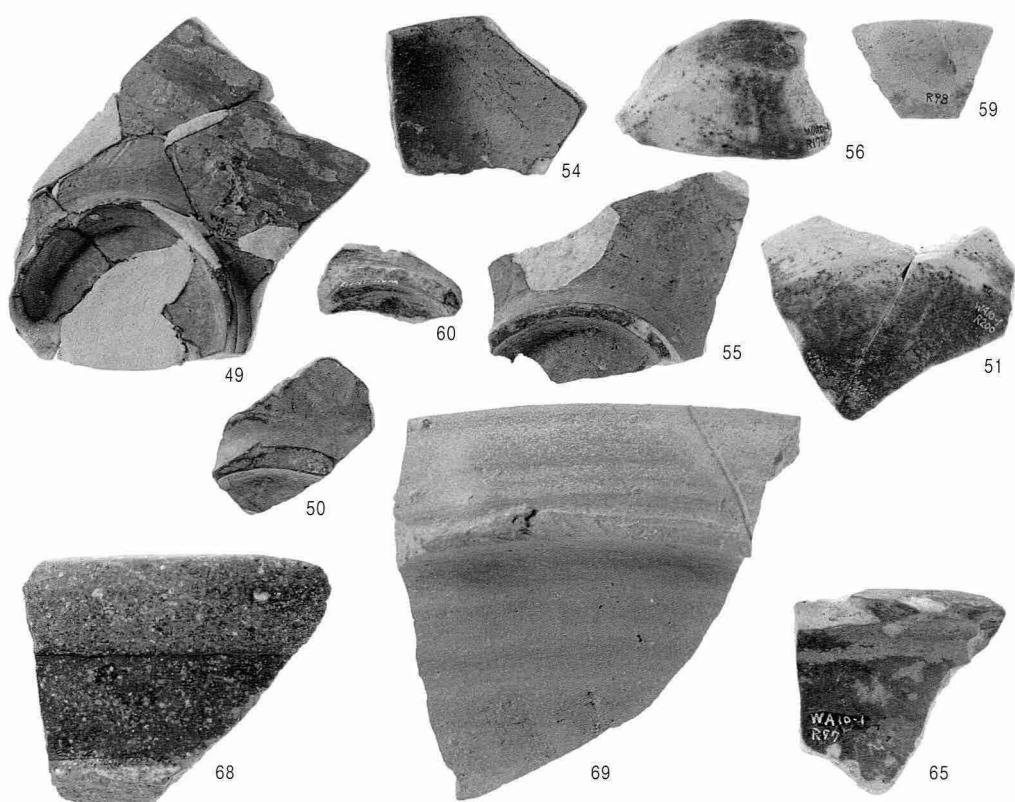


NR31(26~38・40)、SX32(46~48)

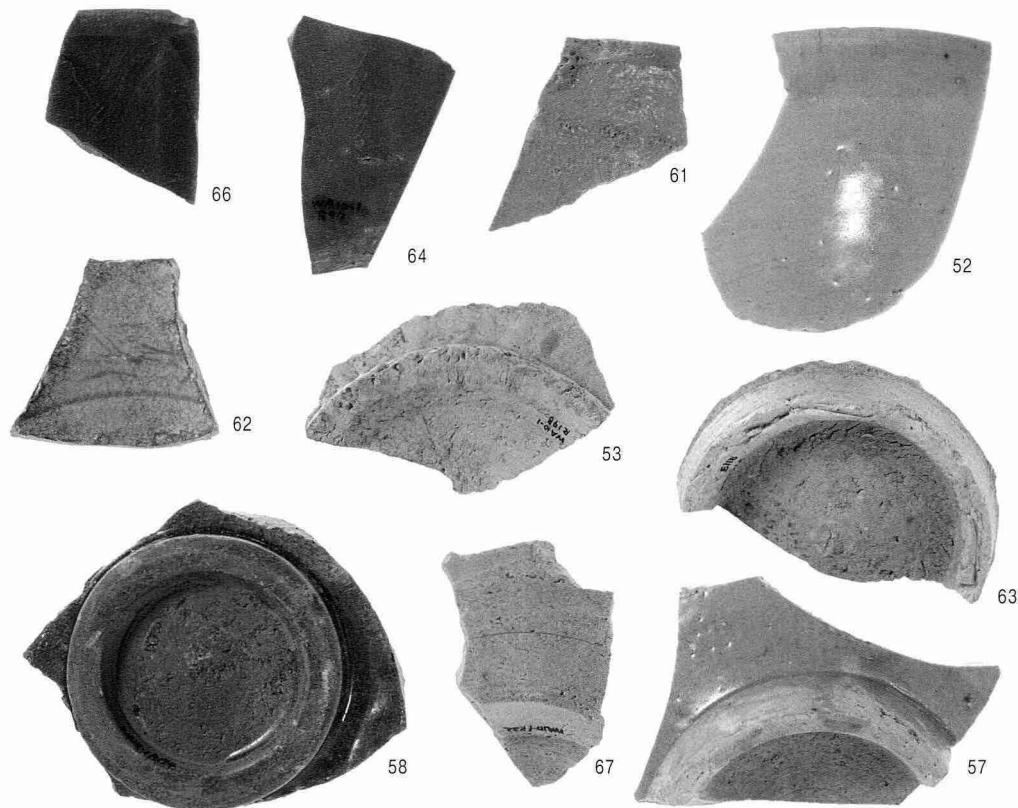


NR31(39・41~45)

図版一四 各層・その他出土遺物

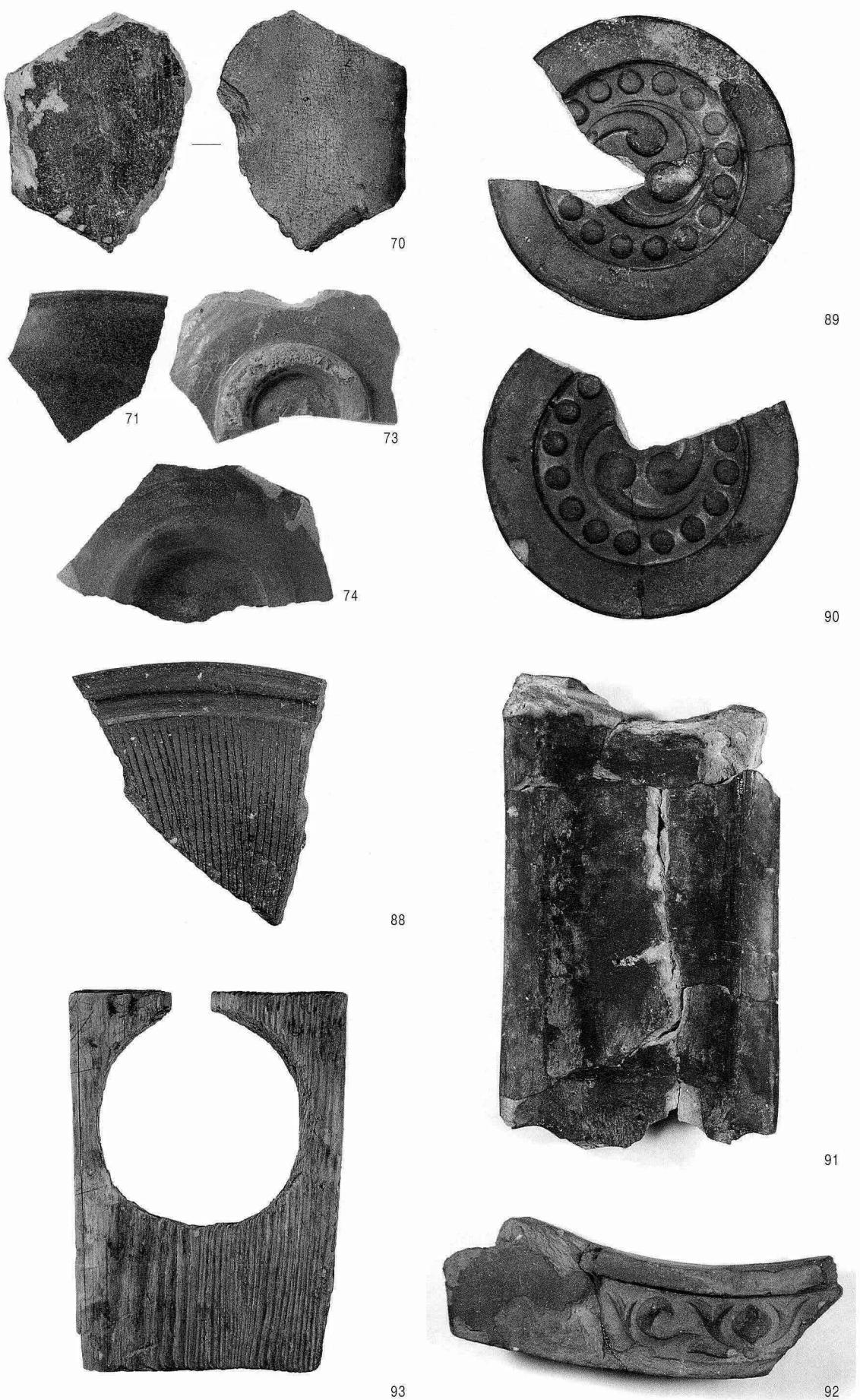


第7層(49~51)、第6層(54~56)、第4層(59・60・65)、SG11(68・69)



第7層(52・53)、第6層(57・58)、第4層(61~64)、第2層(66)、SG11(67)

図版一五 SG11・SE14・その他出土遺物



SG11(70・73・74・88)、SE14(89~93)、第2層(71)

大阪市東淀川区 西淡路1丁目所在遺跡発掘調査報告Ⅱ

ISBN 978-4-86305-060-0

2012年3月9日 発行©

編集・発行 財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 アインズ株式会社 大阪営業所

〒541-0056 大阪市中央区久太郎町2-5-31

**The Excavation Report
of the
Nishiawaji 1-chome Site
in Osaka, Japan**

Volume II

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
The Municipal Apartmenthouse complex
in fiscal 2010

March 2012

Osaka City Museum Organization
Osaka City Cultural Properties Association



**The Excavation Report
of the
Nishiawaji 1-chome Site
in Osaka, Japan**

Volume II

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
The Municipal Apartmenthouse complex
in fiscal 2010

March 2012

Osaka City Museum Organization
Osaka City Cultural Properties Association